

教職大学院 Newsletter No.165

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.12.29(公開版)

福井大学連合教職大学院 東京サテライトの 学びをデザインする

福井大学連合教職大学院 特命教授 福島 昌子

はじめに

約三年前の2020年4月に東京サテライトは福井大学連合教職大学院の分校として開校されました。丁度、新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた頃で、連合教職大学院でも開校式(開講式)が初のZoomオンラインで開催されたときでした。その時の入学生は東京、神奈川、新潟の幼小中高校の国公立の6名の先生方で、同4月に着任したばかりの右も左もわからないスタッフ教員1名(福島)とで、7名で大塚にある事務所のコミュニティ・ラウンジで開講式を行いました。今思うと、無謀というか怖いもの知らずというか、その時はそんなことも考えている余裕もなく事を進めることに精一杯でした。ただ、鮮明に覚えていることは、開講式が終了してすぐに携帯電話が鳴ったことです。それは研究科長の柳澤先生からでした。「お疲れ様でした。無事に終わった？」というものでした。私は何とか終えたことの報告と「疲れ切って言葉が出ません」と何度も繰り返し話したことを覚えています。

そんな東京サテライトも今では遠くは沖縄県離島の宮古島、多良間島からも院生を迎え、在籍16名の院生の学ぶ重厚感のある分校として活気だっています。2年半経ち振り返ると開講したころに手探りしながら進んでいたことが懐かしくもあり、遠い昔の出来事のようにも思えるこの感覚を、何気に心地よく感じている自分がいるような気がします。

東京サテライトの魅力

さて、福井の分校といわれてもイメージがわからない院生の方もいらっしゃると思いますので、ここで

東京サテライトについて紹介をしておきたいと思います。東京サテライトは山手線の内側(大塚)にあり、東京駅から20分と交通の便も良く、事務所(研究室)がある展望コミュニティ・ラウンジは、院生の方たちも自由に利用することができます。このラウンジは、人と人とを繋ぎ、コミュニケーションと協働を可能とする様々な工夫が至る所に施された創造性豊かな空間になっています。また、カンファレンスは、板橋区教育支援センターの研修室を借用して実施しています。コロナ禍で借用できなかったときは、院生は大塚のコミュニティ・ラウンジを使って参加をしていました。この東京サテライトは、福井大学連合教職大学院にとっても初めての分校であり、福井大学が行ってきた「拠点校方式の教師の学び」を東京という立地の利便性を生かし、関東や全国の先生方、学校、教育機関に向けて教師の新たな支援組織を展開することになりました。

その東京サテライトも令和3(2021)年度の開校2年目で、すべての学校種(国公立で、幼稚園、小学校、小中一貫校、中学校、中等教育学校、高等学校)の先生方がそろい、ミドルの先生方、教頭先生、校長

内容

巻頭言	(1)
東京サテライトラウンドテーブル振り返り	(4)
スタッフ自己紹介	(8)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(11)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(16)
10月カンファレンス報告	(24)
国際展開	(30)
研究会情報等	(34)

先生、教育委員会の行政の方々が生籍され、令和 4 (2022)年度は M1 と M2 の院生を合わせると 16 名となりました。また、2020 年 12 月に沖縄県宮古島市教育委員会と連合教職大学院が協定を結び、同市教委が東京サテライトを院生の学ぶ拠点としたことで、2021 年度から毎年 2 名の院生を派遣して下さるようになりました。それもあって関東各都県はもちろんのこと、新潟県や富山県、沖縄県離島の宮古島、多良間島から飛行機を乗り継ぎながら東京会場に集まり、多くの現職の先生方が学ぶ場となりました。そういった意味では、東京サテライトは地域空間を越えた教師や学校の協働探究の追求ができる魅力ある拠点の一つといえます。

東京サテライト DEAL(ディープ・アクティブ・ラーニング)教員研修【NITS コラボ研修】

東京サテライトでは、院生の「学びのイベント」の一つとして、東京と宮古島でラウンドテーブル（以下；RT）を院生の企画・運営の下で開催することを位置づけています。東京サテライト RT は今年度（2022）で第 3 回目を迎え、宮古島ラウンドテーブルは第 2 回目（第 1 回はコロナのため中止）となりました。この二つのラウンドテーブルについては教師教育研究 15 号に投稿予定のため、そちらをご覧ください。ここでは東京サテライト DEAL 教員研修について述べたいと思います。この DEAL 教員研修は東京サテライト院生がラウンドテーブルの企画運営を行うことに対し、私自身（福島）に課した教員研修の企画運営と思っていただければと思います。それは、院生に課題を課すならば、教員である私自身も課題をもってチャレンジし院生と共に前に進みたいと考えたからです。そのため、基本、私が企画・運営を行いましたが、研修の開催地である宮古島の関係者の方々には多大な協力をいただいた中での開催となったことは先に述べておきたいと思います。

研修テーマは、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」-「主体的・対話的で深い学び」を支える新しい教師の実践的力の在り方を探る- というものです。この研修の目的は 2 つあります。一つは教職の理論と実践の融合を基軸に「学ぶこと」「教えること」の意味を問い直し、地域と学校の協働探究の在り方を教師の「主体的・対話的で深い学び」の実体験と共に多職種間で協働・探究・省察をしながら学び合う DEAL (アクティブ・ラーニング) 教員研修とすること。もう一つは、沖縄県離島（先島諸島全域）の当たり前である一方向的な一斉型、または離島が故に動画視聴の教員研修を、沖縄県外の都道府県教員が集結し互いの実践を省察・共有し学び

合う協働探究演習の教員研修として開催すること。つまり、平たくいうと全国から集まった教育関係者一人ひとりが新しい教師の実践的力の形成を自律的に展開すること、そしてそれを離島から全国に発信することを目的としたということです。また、この研修会は宮古島ラウンドテーブル（8/4）の発展的教員研修「宮古島ラウンドテーブル session0」として位置付けていました。

参加者は東京サテライトの院生はもちろんのこと、北は北海道から南は沖縄の離島、全国から約 60 名の教師や教育行政の方々が参加されました。8 月 5 日、Session I の前半では、宮古島の狩俣地域自治体と学校が協働し子どもたちを支える地域環境のフィールドワークを実施し、コミュニティスクールのモデルとなる宮古島市狩俣小学校を視察する。その実体験と共に学校コミュニティとしての地域社会との協働探究学習のあり方を検討する。後半では、宮古島教育事務所にて幼稚園、小学校、高校の三つの学校のパネル・ディスカッションによる具体的な実践事例報告から教師教育の資質向上に向けた研修や取り組みのあり方を提案する。島内外の学校種が異なる教師、自治会などの多職種の参加者同士によるラウンドテーブルを実施し、お互いの学校や地域と連携した取り組みの展開を交流・共有しながら直面する課題についても検討し、展望をひらいていく。8 月 6 日の Session II では、session I で検討し省察した教師の協働探究の在り方を通して、地域と連携した学びの本質に向き合い、神様の島として崇められる「大神島」に船で渡りフィールドワーク（小中学校跡地を巡る）を実施。そして、実践的かつ演習的に省察から「深く学ぶ」ことの展望を拓く研修へと展開しました。Session III では、伊良部島、池間島、宮古島などの幼小中学校を訪問し、島特有の教育活動の視察を行い、教師自身や学校の展望を拓くことに焦点化しました。

上述した教員研修 8 月 4 日から三日間を大自然の中で協働探究演習を経験したことで、参加された先生方の中には「言葉にならない」「言葉にできない」と心の動揺とともに自身の変容について述べられた先生もいました。

最後に参加された方たちの前半にラウンドテーブル、後半にフィールドワークの省察の言葉をいくつか挙げておきたいと思います。「自校の子ども達の課題（今後育成したい力）として、言語化するスキルや、自分の思考を整理し他者に伝える力を伸ばしていきたい。そのためにはまずは、どのようなことをすべきか・・・夏休み中に、他の職員とじっくり対話をしてみよう、と自分への宿題を出しました。自分から心の

扉をもっとオープンにしないといけないと感じたことも今回の学びであります。」「それぞれの学校の置かれている状況は異なりますが、「共有」すること「共感」することの大切さ、難しさを感じているとともに、一律でなくて、各学校教育の課題に対応した取組みが大切で大事なんだということを共有・共感できた気がします。同僚は隣に座っているわけではないということを再確認できました。また頑張ります。」「こどもがとても近い距離にいるんだなとも感じました。大変だなあだけではなく、自分の状況との違いも発見し、違いが分かると「ここを大切にしよう」「ここを意識して子どもと接することが必要なのか」という考えも出てきました。」「原始宗教の残る地域とのことで、現在の私たちの暮らしとは直接的な関わりではなく、ヒトとして先祖から受け継いでいくものに対する畏敬の念を感じました。こうした繋がりの中で、生かされ、現在があること、その中に実践があるのだと思いました。子どもたちとの実践にあたる時、人類の歴史の歩みという大きな視点を心の奥底に捉えながら、気づきや学びを支えていきたいと思います。」「現在は、ICT 活用の発展とコロナによる行動制限によって、資料や動画で簡単に知識を得ることが容易になったが、今回のように知識を得た状態で現地に足を運び、体験から学ぶことはより深い学びにつながると改めて感じた。」「日本人の古層の積み重ねの 1 番古い所を見させていただき衝撃でした。中国の福建、平氏、ポリネシアなどの人々の文化、生活、習慣が積み重なっているのでしょうか。私たちは、生活や環境、文化の中でこれらを受け継いでいるのだろうかと考えた時に、乳幼児教育の中で子どもたちを根無草状態にしないだろうかと思った。」

わたしが大切にしていることは、子どもばかりでなく、教師も五感を研ぎすまし、本物との出会いの中

で心身の感性が揺さぶられるような協働探究演習をおこなうことです。なぜならば、そうすることで子どもたちと一緒に問いと向き合うことができるのではないかと考えているからです。

おわりに

東京サテライトの「学びイベント」は、ここで紹介したもの以外にも、東京サテライト RT、宮古島 RT、長期実践研究セミナー、東京サテライト長期実践研究報告会、院生による自主研究会などがあります。約 3 年前に 6 名の院生たちとスタートした時は、自分一人で何ができるのか、ましてこのコロナ禍でといつも悩んでいました。唯一、思い続けたことは本校である福井大学の学びの質を落としてはいけない、分校だったとしても院生の学びを保障しなければならない、ただひたすらそればかりを考えていました。それが、こうして芽吹き始めたのは、私が悪戦苦闘していたからではなく、一人一人の院生の先生方が「学ぼう」「学びたい」という思いを強く持ち、学ぶ集団へと変容していったことが東京サテライトを支えている揺るぎない源になっているといえます。そして、何といっても修了した 1 期生が常に声をかけてくださり、後輩の院生や東京サテライトを支えてくださっています。他にも東京サテライトのスタッフ教員の皆さまにも支えられての日々です。まだ、ランニングとまでは言えませんが、ジョギングくらいのペースで進み始めたことは確かです。私は院生の方々の最後尾を歩き、この先も笑顔を絶やさず支え続けていきたいと考えています。

最後になりましたが、令和 4 (2022) 年度、東京サテライト三年目の「教師(教職)の総合的な学習」は、これからが本番です。

カンファレンスでみなさまにお会いできることを大いに期待し、楽しみにしております。



東京サテライト/東京サテライトラウンドテーブル振り返り

東京サテライト DEAL 教員研修報告

―「探究する教師像」と「宮古島の自然と歴史」を宮古島で学ぶ―

さくら認定こども園(福井市) 園長 **伊藤 康弘**

はじめに

8月4日～6日に宮古島を舞台に、東京サテライト DEAL 教員研修 (DEAL 研修) が開催された。当園の職員3名と私は、全日程に参加し、当園のプロジェクト保育の実践報告を1日目と2日目に行った。「共に探究する教師像」と「宮古島の自然環境・歴史文化・地域」に直接触れて体験し、その経験や考えたことを報告する。

3日間のプログラムの紹介

(1) 8月4日(木)「DEAL 研修 セッション0」

本研修の責任者である福島昌子先生が「子どもと共に学び探究する教師を目指して」と基調講演を行った。DEAL (Deep Active Learning) は、より内面的な深い主体的、対話的な学びの有り様をいう。DEAL のためには、固定的な思考・観念に「揺さぶり」が必要であるという。本研修での「揺さぶり」は、日本全国からの幼小中高の各先生方の実践報告、ラウンドテーブル、フィールドワーク (FW) なのだろうと思った。また新学習指導要領の「3つの力」の育成について話され、「資質・能力」「学びに向かう力」は、DEAL が育むという。

次に、地元宮古島を含めた幼小中高の4名の先生方が教育実践を報告した。特に宮古島北小の砂川輝晃先生は、実践研究を、(1) スモールステップ、(2) ストーリー性などの大切にしたいことを柱として進めておられ、宮古島の先生方が地についた堅実な実践研究を進めておられると感じた。参加者の先生方は、幼小中高の探究による子どもたちの学びに、本質的な違いがないことを目の前で見られ、探究活動が子どもたちの学びの中核である実感を持たれたと思う。私は、当園でのプロジェクト保育の実践報告をして、当園の探究活動を推進する要因を報告した。4名の実践報告者と福島先生によるパネルディスカッションは、参加者からの質問に答える形で進められた。

午後は、福井大学の宮本雄太先生によるラウンドテーブル入門編の講義、セッションⅠのラウンドテーブル、セッションⅡのラウンドテーブルが行われた。本日の講演・実践報告から、自身の実践を振り返り、教師としての捉えを省察し、子どもたちの主体的な学びを支える「教師とは、学校とは」を巡って、今後の自身の取り組み、自校の取り組み、未来の姿などを語り合った。

(2) 8月5日(金)「DEAL 研修 セッション1」

2日目午前中は、宮古島教育事務所の研修室で、FW対象の、狩俣の歴史文化・地域の講話を狩俣の自治会長さんと元中学校の校長先生からお聞きした。「狩俣には古い時代に島外からの三つの集団が定住してきた」という物語が、狩俣地域で「神歌」として口承で伝えられているという。口承とは、人から人に何世代もつないで、紡いできており、現在から未来へもつながるのだろう。狩俣地域では、「祖神祭」「神歌」等が伝承されており、神々の住む地域として知られているという。神話の時代が現代に生きているのだ。

講話後、狩俣地域のFWに出発した。宮古島の市庁舎がある南部から島の北端にある狩俣地域へは、いつまでも続くさとうきび畑の間の1本道を40分ほど走る。現代と神話の時代をつなぐタイムトンネルのように思った。狩俣地域を自治会長の案内で散策しつつ、歴史文化・地域を感じた。ホテルに戻って、口承の歴史に直に触れた経験から、私も当園の5歳児の物語 (プロジェクト保育) を紡いで、参加された先生方につないでほしくて、宮古島にきたことを思い出した。またレイ・ブラッドベリのSF小説「華氏451度」を思い出した。焚書の未来世界で、物語を愛する者たちが手分けして本を暗記して、伝え合うという、暗いけれども魅惑的な世界だった。午後は、宮古島教育研究所で、幼小高の先生方による実践報告が行われた。幼高の実践報告者が、前日とは別の捉えを提示していて、DEAL 研修らしいと思った。宮古島の小学

校の先生は、子どもたちの海の経験を事実と捉え、意味としての海に捉えを変容させていく実践を報告されていた。

ラウンドテーブルⅡでは、3校の実践報告から、探究や問の立て方について、各テーブルで意見交換を行った。またFWで得られた宮古島の自然・歴史文化について話題があり、青い空、青くて豊かな海、力強い太陽、水が豊富なこと等の自然環境が、宮古島の良さであろうといった島外参加者の意見があった。

(3) 8月6日(土)「DEAL 研修 セッション2」

3日目は、FWを大神島に移し、神々の住む島を体験した。宮古島本島から船で15分ほどの小島で、中心部が小高い丘になっていて、その頂上に展望台がある。麓から展望台までウッドデッキの遊歩道が整備されている。大神島の自然と歴史文化を実感するにつれて、私の背負っている看板が軽くなっていることに気づいた。遊歩道を登っていく中で、自身を覆ってきた鎧が落ちていき、素直な私に気づいた。一番傾斜の強い頂上前で、息が切れて止まった時、遊歩道の両側の手すりフェンスが視界に入った。大神島の麓から頂上への道を私の人生と捉えると、両側の手すりフェンスは、右側は家族の支え、左側は園の職員の支えかなと思った。いつも一緒に伴走している家

族と職員に感謝したいと素直に思った。大神島から戻ると、幼児教育グループは宮古島市教委の保幼小連携担当の宮國先生より、市立下地こども園を見学・訪問させて頂いた。園長先生や職員の方々とお互いの保育実践を情報交換させていただき、地域が違って共通の悩みを共有できたことが収穫であった。

まとめ

宮古島の3日間のDEAL教員研修は、西部地域の2回のフィールドワーク、幼小中高の2回の実践報告、3回のラウンドテーブル、幼小中高の現場訪問から構成された、宮古島全体を学びの場とする、総合学習として構成された、素敵な研修であった。大神島では自己との対話の時間を持ちDEALに相応しい学びを得た。

私は、2日間の「狩俣地域」「大神島」の2つフィールドワークによって、固定的な思考・観念に「揺さぶり」をかけられ、DEALに相応しい気づきを得たと思う。

最後にコロナ禍の最中でも笑顔を忘れず、カリキュラムマネジメントや地元との調整に奔走された福島昌子先生と東京サテライトの修了生・院生の皆様にお礼を申し上げる。

子どもたちのために、の前に自分のためにも

株式会社コナミデジタルエンタテインメント 作曲家 中島 直樹

午前中、荒瀬先生のご講演の中でキーワードとして挙げられた「指導の個別化」「学習の個性化」「子どもの学びと教師の学びは相似形（学びの往還）」は、私が過去数年間の教育実践の中で取り組んできた内容と重なる部分も多く、とても興味深く聞かせていただきました。

私は「作曲家」としての仕事の他に学生の頃から音楽やアートによる社会的な活動に取り組んできました。そうした取り組みのきっかけとなったのは東日本大震災でした。当時中学2年生だった私は、翌年に父とふたりで宮城県名取市から岩手県釜石市までを取材してドキュメンタリー短編映画を撮りました。そこで見た光景、聞いた話、そして肌で感じたことを同世代の友人たちとシェアしたいという気持ちから、音楽/アートで東北と繋がるプロジェクト「Mother Earth Project」を立ち上げたの

が2013年。その後、東北を中心に活動は広がり、2017年から現在までの5年間は学校などと連携し、音楽/アートを子どもたちと共創するプログラムを岩手県遠野市や首都圏を中心に行ってきました。

そうした総合学習への参画など教育にまつわる活動をしてきましたが、提供する我々に教育を専門に学ぶ人間はおらず、芸術や文学など創作や表現、研究を主戦場としている人間が集まっていたため、理論に裏づけされた手法ではなく感覚と臨機応変の繰り返しで続けてきました。しかし、荒瀬先生のご講演の内容はそれら感覚が言葉に置き換わり、価値付けされる瞬間の連続で、先生の言葉と自分の過去の経験が結びつき、とても興奮しました。

特に「子どもの学びと教師の学びは相似形（学びの往還）」に関しては強く共感いたしました。共創

プログラムを作る前提として、ティーチングアーティストという「アーティストが教える立場を経験することで、アーティスト自身の成長と生徒の成長に繋がる」というアメリカで誕生した考え方を実践したり、またそれに加えて、被災地で音楽活動を行っていた当初から被災者とボランティアという関係性ではなく、1人の人間として、1人の友人として関わることを大切にしていた背景もあったため、子どもたちとの関係性においては、一緒に物づくりをするパートナーという意識で共に成長する時間を作ることを大事にしてきました。そのため子どもたちと共に大人も学びながら成長する事は改めて価値のあることだったのだと認識することが出来ました。

午後、沖縄の実践発表では、石垣島で郷土芸能を部活動で踊っている子どもたちが、コロナでそれ以前のように踊れなくなってしまったこと、他地域との交流大会が思うように出来なくなってしまったこと、しかしデジタル技術のおかげでオンライン交流という新たな可能性を見出して一歩踏み出していることなどを発表してくださいました。

この発表を聞いて、コロナによる社会変容により、生徒たちの手に本来届く範囲に留まらない要素（他の地域の人）が部活動に入ることによって、生徒たちの思考がそれまでの円状（同じサイクルの繰り返し）から多角的もしくは不規則（Unpredictable）となり、よりクリエイティブとなれる環境が出来たのではないかと思います。また、島の外に活動を広げられる可能性（コストをかけずに人と繋がることのできる）を感じて、自分たちでニューワールドを開拓する精神も養われそうだと感じました。

最後の RT では探究学習に関してグループの先生方に質問を投げかけ議論をいたしました。私のグループには幼児教育を専門に研究していられる方もいらしたのですが、幼児に対しても最近遊びの中での弦きを拾い上げ、なるべく幼児自身の意思や主体性を尊重するとのことで、自主性、主体性を育てる教育をしているとの事でした。そうした教育が幼児期から既に始まっており、中学高校までずっと繋がっているというお話は驚きで、眼から鱗の連続でした。そう考えると、「ルールを敷く」という先生が生徒をゴールまで理想的なルートで導くという言葉も、私もこうした教育関係の議論をするときに使っていましたが、そもそも「ルールを敷く/敷かない」という観点で考えていることがもしかすると本質からズレているのかなと感じました。大きなゴールや目標は先生が設定してあげるにしろ、そこへのアプローチは先生と生徒が試行錯誤しながら考えていたり、生徒が自ら行動したり発言するまで観察しながら待つてあげる事が大切なのかなと議論を通して感じました。ただその場合、生徒に全てを委ねる、放任するという考え方では、怠惰な生き物である人間は墮落してしまうと思われるので、生徒がモチベーションを上げられる、保つことのできる環境を作ってあげる事こそが先生に課せられた役割なのかなと思いました。

最後に感想を書くにあたり、学生の頃を振り返ってみると、当時の方が主体性があったイキイキしていたと感じる自分がいたので、子どもに対して良い環境を作ろうと考える前に、私自身も自主性、主体性を瑞々しいフレッシュな状態に保つために、定期的に水やりをしておかないと枯れてしまうなど強く感じました。

東京サテライト ラウンドテーブルに参加して

森田さくらこども園 園長 伊藤 仁美

「北は北海道から南は沖縄まで」と良く聞くが、今回のラウンドはまさしく東京を中心として日本の隅から隅までの先生方が参加されていると感動し幾度となく名簿を見直した。しかも、立派な校種の皆さんばかりであり「私たち幼児教育は何を話せばいいのか」と不安になったことを思い出す。国外からの参加もありそこは zoom ならではの利点だが、第三部の直前に突然私の声が皆さんに届かなくなった時は焦

りまくった。私無しで進めていただこうと諦めながらも職場である園内を走り回り、何とか他の機器をつなげて音声復帰できたが、ICT のデメリットも理解した上でいくつか用意しておくべき事も学んだラウンドテーブルであった。

しかし、参加後は余りの充実感に満ち溢れて余韻に浸り、当日参加者の職員はそのまま残ってそれぞ

れのテーブルでの学びを報告し合った。また翌日も職場で語る、他の職場でも語る、一週間経っても語る、まだまだ幸福な気持ちは続いているのである。そのくらい、素敵なラウンドテーブルであった。校種は違っても教育に対する悩みも情熱も同じだと感じたひとときである。

1. 八重山高校郷土芸能部からの学び

コロナ禍という難題をマイナスと捉えず、生徒の笑顔が見たいという目標の下に生徒自身が活躍できる新たな活動の場を、ICT を使って考えた事。今まで顧問主導であったが部員主導になってきたと捉え直しが出来ている事。今までやりすぎていたかなと反省しながら次の担い手や顧問が継続できることを考えている事。以上感動した点である。

当園に置き換えて、法人の理念も同様「ひとりの笑顔がみんなの笑顔に」であり、改めて目標設定の位置づけの大切さを感じた。保育の現場でも子ども達にとって視覚化や直ぐ見られる、保護者にも理解していただける、他のクラスの保護者や地域にも発信できる ICT。働き方改革になっている。また、教師主導ではなく、子どもを真ん中に置くことの大切さは自分自身だけでなく周りの大人にこそ重要だ、幼児教育にも。と再確認できた。

2. 北照高校ワインプロジェクトからの学び

「魅力ある学校づくり」には教職員全員の共通理解が重要である事。同僚を憎む事が目的ではなく、仲間

を作る必要があるという事が響いた。ワイン造りの活動の可視化と教職員と生徒たち、地域との対話が広がりのおかげになっていると感じた。

幼児教育では、当園も私立で同じように園児数が重要であり、少子化で激減している中選ばれた園になる必要がある。今まで培ってきた保育を築き上げる事も大切だし、新しい保育もまた取り入れていかなければならない。そのためには、職員といつでも子ども達のつぶやきや活動を語り合う事が大切だと改めて感じた。

3. グループワークからの学び

グループ構成員全員から自分の「つながる」実践報告をしていただいた。e ラーニングや教員研修、赤ちゃんと触れ合う事業などの報告があったが、一番心に残ったのは北照高校の「セカンドペンギン」の話である。「生徒たちが最近やる気が起きないのでどうしたらよいのかが課題である」という問題提起にハッとした。

プロジェクトはどうしたらいいのか議論し試行錯誤している時は職員も子どもも大変だが、実はそこが醍醐味であり、ある程度出来上がった時こそ次の目的設定や次の課題を子ども達と共に話し合って決めると違ってくるのではないかと考えさせられた。

最後の「思い切って動くとなつながるんだ」という言葉を胸に、学び直し多き東京サテライトラウンドテーブルに感謝である。

ジャングルとしての東京サテライト

～多様性を以て安定を保つ～

東京大学教育学部附属中等教育学校 **大井 和彦**

サテライト (satellite) とは語源的には従者のことである。即ち東京サテライトは、飽くまでも福井大学教職大学院に添う存在である。しかしながら、この従者は福井とは様々に異なるという点において特殊な従者である。

福井大学教職大学院は、月間合同カンファレンスと夏冬の集中講座、そしてラウンドテーブルの参加受講を中心に、各勤務校で各々の設定した課題に取り組む学びとなっていて、殊に校種・教科を越境した学びを考える教職大学院であると思う。多くの教職

大学院は通常勤務日においても大学院の授業や研修等設けられているが、福井大学教職大学院は勤務校での日常の中で課題を解決することを目指すため、平日に勤務から離れてそれらに参加するような形はない。これは現職教員として大変ありがたい課程である。そのような希有な環境を東京で享受できることを可能にしてくれた場所が、東京サテライトである。

その東京サテライトは 2020 年度から開かれた。私はその一期生にあたるが、同期は全員現職教員の 6 名

とまだ少なく、コロナ禍影響によるオンライン実施によって、結果として東京で完結せずに福井や全国の院生の方々との交流を保障していただきながらその歩みは始まった。

その東京サテライトが特殊な従者であるところを紹介する。その一つが、その初年度から院生の企画運営による東京ラウンドテーブルを開催していることである。このねらいは院生の力量アップ、各々の教員としてのネットワーク（人脈）の拡大、そして教職大学院で培っている実践力を勤務校で速戦的に活かすという福島先生の意図による。20年度は「ICTで探究と協働はどう育まれるのか?」、21年度は「社会とつながる教育・学校」、そして22年度は「子どもたちのWell-beingを生み出す教師の探究～つながる教育～」と“つながる”ことを考えるテーマを続けてきている。このことは、各勤務校における「教員と生徒との関係」「管理職と教職員との関係」「中堅職員と若手職員との関係」の相似形が「東京サテライト内の関係性」に作られるという点において、院生自身のマネジメント実践学習、そしてエージェンシーを育む機会となっている。

また特殊な従者であることのもう一つの点は、所属院生の地域の多様さである。一期生の中でも東京、富山、新潟、神奈川と広がりがあるが、2021年度に福井大学教職大学院が宮古島市教育委員会と連携協定を結んだことによって、二期生から沖縄、千葉、埼玉とさらに広がった。そして、校種も国公立の幼小

中高が揃った。福井から東京サテライトへの繋がり、そして東京サテライトという場所においてさらに各地域の相対化が促進されるという大変恵まれた環境となった。そして、21年度には8月夏期集中講座のcycleの一つを宮古島で実施し、宮古島の先生方と共に学ぶことも始まった。その流れで宮古島ラウンドテーブル（こちらでも東京と同様に院生の企画運営開催）と、教員免許更新制度廃止に伴う研修構築としてのDEAL（Deep Active Learning）研修を行う予定であったが、コロナ禍による影響で一部中止と縮小開催を余儀なくされた。22年度は宮古島ラウンドテーブルとDEAL研修を無事開催し、全国から参加された多くの先生方、そして島内の先生方とともに語り合った。三期生には、各学校の管理職や指導主事、企業経験のある教員や専門学校の教員もさらに加わり、視座と視野の広がりを持ち始めている。

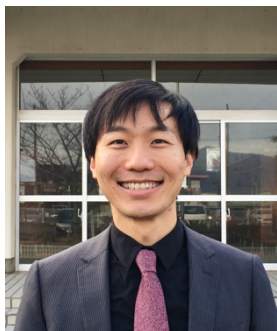
このように福井による学びに加えて、東京という環境の齎す学びがここにはある。特殊というよりも個性的な従者として、その学びを福井との互惠関係の中で考え広げていくことができると、それに伴って福井大学教職大学院の学びがさらに全国へ広がるのではないかと期待する。

修了生としてはこのような東京サテライトに、福井大学教職大学院におかれては更なる御指導を賜りたく、また現職の先生におかれては是非とも同志となつてくださることを切に願う。



スタッフ自己紹介

福井大学連合教職大学院 特命助教 William Wongsowajar Tjipto



My name is William Tjipto. I was born and raised in the United States to Chinese immigrant parents. I came to Fukui, Japan, in July 2014 and I expected to only stay here for a year because I wanted to go into teaching back in America, but many things in my life changed since then. Although I already experienced a little of the Japan that many tourists also

know, living here is very different and much better than I could have possibly imagined.

I worked as an ALT (Assistant Language Teacher) at Obama Daini JHS in Obama City for eight years. As the T2 secondary role in the classroom, I helped the JTEs (Japanese Teachers of English) with classes, making worksheets, planning activities, and playing word games with the students. Communication was a key aspect I tried to focus on as an ALT, encouraging the students to make use of English in fun, interactive, and real ways.

The most important thing I came to realize was that the people make life here truly worthwhile. Every day at school was an adventure with my rambunctious and fun students; some of them may not have wanted to study English, but they certainly wanted to talk with me. The kind people in the local community and the small, but active foreigner community make me feel as I am living in some expanded family; there is a real sense of Community, togetherness, and purpose.

Although I came to Japan with little knowledge about the Japanese education system, I was supported by other veteran ALTs working in other schools and by the staff at my school. Working with the JTEs at my school was a wonderfully positive experience, with each teacher sharing their knowledge and skill with me as I grew into my position. When I gained enough confidence in myself, I found ways to Collaborate with the experienced teachers to improve classes by fully utilizing the Team-Teaching arrangement.

Encouraged by the JTEs and my principal, I sought to further my skills as a teacher by applying to the Department of Professional Development of Teachers at the University of Fukui program in early 2020. It was then the COVID-19 pandemic changed not only my job as an educator, it changed the world. This only encouraged all of us to continue to rethink education in the 21st century, focusing on student agency in the context of modern challenges.

I started working here in DPDT at the University of Fukui in October and once again, my idea of “teaching” has changed. We are connecting with various countries via numerous international projects, bridging the divide between people through the shared goal of improving education around the world. I strive to find further ways to develop mutual learning relationships between JTEs, ALTs, and students, both Japanese and foreign, with the goal of cultivating new ideas in education and focusing on my strengths, looking toward the rest of the 21st century.

3の立場で参加

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー 清川 卓二



2022 年 清川家 年賀状

本年度より、コーディネートリサーチャーを務めさせて頂いております。清川卓二です。福井大学工学部を卒業し、大阪の Panasonic での3年間の修業の後、父が創業した清川メッキ工業株式会社にて、現在、社長の兄を支え、専務として勤めております。清川メッキは、創業60周年となり、社員約340名のめっき加工業者です。スマホ等の通信機器の電子部品めっき、産業用ロボット等の機械部品めっき、医療、宇宙産業用の特殊めっき EV, PHV, HV の自動車用のパワー半導体めっき等を実施し、福井でめっきした製品の7

割は海外で使用されています。家族は、妻一人、子ども6人(長男の妻含む)、孫1人、ペット2匹で、小中高 PTA 活動は、会長経験を含め2周半経験しております。

また、長年、キャリア教育を実施し、2000年より「めっき教室」を、また2005年より福井商工会議所青年部「おしごと探検隊 アントレ・キッズ」をはじめ、学校と地域と企業の協働による教育を進めてきました。2010年には、文部科学省の「キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協議会委員」として参画、2011年には、第二回キャリア教育アワードにて「アントレ・キッズ」が「経済産業大臣賞大賞」、「めっき教室が優秀賞」ダブル受賞を頂いております。

2012年経済産業省「キャリア教育の内容の充実と普及に関する調査委員会委員」を経て、2013年より、独立行政法人教職員支援機構「キャリア教育指導者養成研修」講師を務めさせて頂いております。

コーディネートリサーチャーとしては、①経営者の立場、②PTA活動を教職員と一緒に実施している親の立場、③長年キャリア教育を実施してきた地域人

としての立場を、織り交ぜ、皆さんと未来に向けたビジョンを考えて実践していきたいと思います。

キャリア教育とめっき教室を始めたきっかけをお伝えします。修行先から戻り、父の会社は、大変忙しく繁盛しておりました。しかし、職人気質の社員が多く仕事は、「目で盗め」の時代でした。そのころには、新卒社員も入社するようになり、社員も増加傾向でした。しかし、入社した社員が次々辞めてしまいます。職人の先輩は、仕事を教えてくれない、説明を聞いても専門用語でわからない、二度聞くと怒られる。教育資料もなければ、教育方法、スキルの無い状態でした。職人になりたい人たちには、自分を奮い立たせ自分が成長できる環境でしたが、新卒社員にとっては、辛い職場となり辞めていきました。その状態が数年続くと、社員の疲労感とモチベーションが低下していききました。「我々は、こんなに素晴らしい仕事をしているに、教えても、教えても、若者が辞めてゆく」と

仕事の誇りを失い欠けていました。そこで、社員が仕事に誇りを持てる一番の方法は何か？と悩んでいる時、長男から「お父さんの仕事は何しているの？」と聞かれました。色々説明した後、長男から「お父さんって凄いい」と言われ、これだとひらめきました。社員が、自分の子ども達を会社に招き、オリジナル金めっきペンダントを教えながら製作する「めっき教室」を実施しました。子どもたちが、「お父さん(お母さん)って世の中のためにこんな凄いいことをやっていたんだ、このペンダント学校で自慢しよう」と喜ぶ姿を見て、仕事の誇りを取り戻していきました。子どもたちに教えたことで、新卒社員への教え方も変わっていき、今では、社員が辞めない会社となり、当時 100 人の会社が、22 年で、340 人の会社となりました。社員に誇りを持たせた活動が、今は地域から求められ、キャリア教育として貢献出来ていることに社員も誇りを持っています。



福井大学連合教職大学院 客員准教授 船谷 友代

今年度、スタッフの一員として教職大学院に加えていただきました。普段は、附属特別支援学校の教員として、小学部のクラスに入ったり、附属学園の教育相談にあたったりしてい

ます。

10 年ほど前には、教職大学院に入学して学びました。2 年間で、いろいろな校種の先生方と、ときには異業種の方と語り合い、多様な視点をいただきました。漠然とした思考を言語化し、話したり書いたりすることは簡単ではありませんでしたが、日常の業務では出会えないような方々とのやりとりから、はっとさせられることの連続でした。とかく狭くなりがちな視野を広げ、自分自身の中に客観・俯瞰の視点をもつということがどういうことなのかを体感しました。これらのことは、今、一人の子どもに向き合うときにも、組織の一員として業務に当たるときも、役立っていると実感しています。

多様な視点で物事をみたとき、そこから自分はどれをどう選んで行動にうつしていくのか悩むこともしばしばです。そのときのベストをとったはずが、振り返ってみるとそうでもなかった、とか、また違う道

があった、とか。そう考えていると、いくつかの出来事を思い出します。そのひとつ…、十数年前の出来事です。小学校の先生から、高学年のクラスの相談を受けました。近所の公園の壁に、特定の子を指すとみられる落書きがあり、書いた方も書かれた方もクラスの子であるようだ、書いた A さんは以前から周囲とトラブルがあるが非を認めないことが多い、どうやったらうまく反省を促せるか、というような内容でした。先生は、書かれた B さんがひどく傷ついていて、A さんが B さんに謝るしかない、と慌てているようでした。状況を確認するために、先生と一緒に情報を整理してみると、慌てて結論づけてはいけない、いくつかの側面がみえてきました。A さんの行動であると確定できる材料がないことや、書かれたと思しき B さんが普段から A さんら複数の子に高圧的な言動をとりがちであることなどです。ここから、先生と一緒に、A さんへの対応、B さんへの対応、クラスへの対応を考えていきました。ここで先生と確認したのは、加害者と被害者という明確な構図はない、犯人捜しに執着しない、ということでした。いろいろな立場から「これからどうしていけばよいか」と考える材料に切り替えたのでした。子どもたちと一緒に、壁への落書きはよくないことであるのは間違いのない、書いた人がどうしてそうしてしまったか、書かずにどうしたらよかったか、などと考える機会となりました。そ

の後、他のクラスの先生から、「Aさんに、行動を認めさせたのか？」と問われた、と聞きました。詰め寄って謝らせるということではなく、心情を受け止めて次からの行動を考えることにつながられるのであれば、「行動を認めさせる」ことをしてもよかったのかもしれない。何をどう選ぶか、迷い悩むことの連続です。

迷い悩むことを繰り返しながら、また一日が始まります。そして、迷い悩んだら、話すことで乗り越えています。

教職大学院でも、子どもたち一人一人の学びについて、また、私たち教師自身の学びについて、皆さんと一緒に考え、語り合っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

授業実践を通して見えてきたこと

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校

小林 歩実

時間の流れは早いものであったという間に2022年が終わろうとしている。初めての車通勤、初めてのインターンシップ、初めてのカンファレンスと初めてづくしの一年間であった。私は至民中学校で現在インターンシップを行っている。インターンシップ中は主に、美術の授業参観を行い、生徒との関わりの中で美術に対してどのようなことを感じているのか、またどのようなことを表現したいのかを対話を通して学んでいる。また、学年の所属として1年生に配属されているため、美術だけでなく1年生の他教科の参観も行うことができた。至民中学校の校風、環境について慣れていく、そしてその学校の生徒にあった授業を考えていきたいと思い学校での時間を過ごしていた。そして9月に授業実践を行う機会を頂き、中学2年生を対象とした授業を行った。今回は実践で行った授業と構想、教科としての役割について考えたことをまとめていきたいと思う。

至民中学校2年生の生徒数は129人で、4クラスで編成されている。日頃の授業から、自身の考えや意見を発言することが鍛えられているため、互いのことを尊重しつつも、自分の考えや主張をすることが出来る生徒が多いと授業を参観していく中で感じた。また美術においても、「自分のために作品を作る」ということに意欲的であるため生徒と一緒に授業をすることを楽しみにしていた。一方で、美術の授業数が少ないため、限られた時間で完成させることを第一

の目標としている生徒や、発想においても「アイデアがでない」「何を作っているかわからない」と困り感を抱き、手が止まっている生徒もいた。その結果、自身の作品に対して愛着をもてない生徒がいると参観をしていく中で感じた。今回授業を構想していく中で、自身の作品に愛着を持つことができること、時間をかけて丁寧に制作に取り組むことによって、達成感や自己肯定感を獲得することができる授業を作っていきたいと考えた。

授業題材として「象嵌」という技法を使ったキーホルダー作りを行った。「象嵌」とは、違う素材同士を組み合わせる技法である。シリアのダマスカスで生まれ、シルクロードを経由し日本に伝わった。日本の最古のものは古墳時代に作られた石上神宮（いそのかみじんぐう）の七支刀（しちしとう）という「金象嵌」で剣に金を用いて文字が刻まれている。現在でもその文字についての解析が行われているなど、丈夫で長持ちするものである。日本には肥後象嵌や、京象嵌などが継承されており、アクセサリなどきれいで可愛いものが多い。今回の授業ではバイオリンの指板として使われている「紫檀」という木材に貫通するように穴をあけ、その穴に「アルミ線」を埋め込み、やすりで「紫檀」と「アルミ線」の境界が分からなくなるまで磨き、キーホルダーとして仕上げた。1～5つの穴を使って、キーホルダーの模様をデザインすることを条件とした。

本物の工芸技法を体験することで、SDGs の観点から「物を愛で大切にすること」について実感を持って感じてほしいと考えた。素材が自分の手を通して美しくなっていく過程を通して、自身の作品に対して可愛いと思うことが出来るように制作に臨んでほしいと生徒と共有して授業が始まった。「努力（時間）が形になるという経験」と「何事にも前向きに取り組む姿勢」の獲得を授業の目標とし、美術が苦手になる要因の一つである「発想」のハードルを今回の授業では下げたため、美術に対して苦手意識をもっている生徒が楽しんで制作している姿を見ることができた。木材を紙やすりを使って磨くことがメインとなっているため、ざらざらな木材がどんどんつやつやな触り心地の良いものになっていくのを体験することで、もっときれいに磨きたいと放課後に磨きに来る生徒もいた。129 人いたが、全く同じデザインのものは一つもなく、その違いや、デザインが好きな他の生徒の作品を授業中に話している様子も見ることができた。

硬い木材である「紫檀」と向き合っていく中で、傷だらけのものを自身の理想とする姿に変化させることができたという経験と自信は、これから出会う課題と向き合っていくうえで、支えになってくるのではないかと感じた。

今回授業を作っていくなかで、学部からお世話になっている美術科の先生、至民中学校でメンターをいただいている先生と一緒に授業を開発していった。専門性の強い大学と、現職の先生と校種を越えて開発することで見えてくるもの、専門性と実際に現場で行うことができることなど、バランスをとっていく中でより良い授業を目指すことができたと感じる。美術の先生が学校ごとに 1 人しかいないことが多いため、このような経験はとても貴重であると感じた。それぞれの強みを良い形で生かしていけるように学んでいきたいと思う。

授業実践で学んだこと

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

渡辺 昇希

4 月に大学院に入学し、1 年目も終わりに向かおうとしている。私は現在中学校の理科の免許を取るために大学での授業を受けることが主であり、インターンは毎週月曜日の週 1 回である。そのインターンでは理科の教科担当の先生の授業に出向き、見学させていただくことがメインである。しかし、最近私はある悩みを抱えている。どのように授業を見ればいいのか分からなくなってきてしまっているのだ。授業を見学させていただいても、ただ漠然と見ているように感じる。11 月の月間カンファレンスでは私が授業を参観した様子を発表したところ、「主に授業の外観を見ていらっしゃるのですね。生徒と先生のやり取りは見学なさらなかったのですか。」と質問されたが、自分は今どのような授業が作りたくて、どんな目的で授業を見学しているのか、混沌としていた状態であった。そしてなぜ生徒と教師のやり取りが重要であったのか、なんとなくは感じるがはっきりとは分からない状態で、その時は曖昧に返事するしかなかった。

12 月 12 日に理科の「雲とそのでき方」というテーマで授業実践があったため、事前に授業の準備を行

っていた。授業の準備は大変苦労した。その理由として、1 つ目は授業の組み立て方を知らなかったことである。今まで授業をなんとなくで構成していたところがあったので、いざ準備しようとなるとどのような道筋で作ってあげればいいのか分からない。そのため、どのような実験を行おうかも決めることができずにいた。今回の授業を通して何を伝えたいかが定まらずにただ時間だけが過ぎていった印象が強く残った。

2 つ目は生徒が何を分かっている、何を分かっているのが全く分からなかったことである。一般的に教える範囲の中でここは分かっている、ここは分かっているというところが全く把握できていない状況であったため、どこを教えたらいいのか定まらない。ここで生徒は日常の授業で教師の問いかけに対してどのように考えて答えているのか、ここが大事なのか、と気づいたところでもあった。

不安しかないまま迎えた実践。とにかく「生徒と対話する」ということを意識して必死に授業していた。授業の構成は雲のでき方を理解するのに重要な「断熱膨張」を理解することを主題とした。まず雲のでき

方をおさらいし、そのあとに断熱膨張を学習する流れであった。授業では思ったより多くの生徒が話を聞いてくれているように見えた。しかし雲のでき方を考え、そして「断熱膨張」について考える構造が生徒を混乱させてしまったのか、授業の前半が終わった段階で「分からない」という生徒の顔が見えた。自分の思考の仕方をもとに授業を作ってしまったため、授業がかなり複雑になってしまった。この点は自分にとっての反省点であった。

生徒に雲のでき方について様々な質問を問いつけている間、附属の生徒でも日常的な経験や常識をもとに考えているのではないかと知ることができた。附属義務学校は他の学校と違い、より論理的に考えて答える、あるいは豊富な知識をもとに答えるのではないかと考えていた。しかし実際はそうではなく、意外に日常的な経験をもとに問いかけに答えていた。しかし、知識と知識を結び付け、理解につなげる力、理科が好きな生徒は大人でも知らないような知識を持っていたりと、附属ならではの場面も見られた。

授業実践を終え、反省点や良かった点を振り返った。反省点は主に2つある。1つは本時の目的に見合った実験を行えていなかったところである。理想は生徒が実験から分かったことをもとに本時までたどり着けることであったが、実際は実験結果を通して間接的にわかる、という状態であり、行う実験の意図を明確にすることの大事さを学んだ。

2つ目は実験の意図をはっきり伝えることができないまま実験をした結果、生徒をさらに混乱させて

しまったことである。授業実践では生徒の理解を優先するがあまりに全体的に時間が押しており、その焦りから実験の意図を伝えないまま実験に入ってしまった。実験では生徒は楽しかったそうだが、そこから学びがなければ実験をした意味が薄れてしまう。原因は授業の構造が複雑であることが考えられた。如何に授業をシンプルにして、授業の趣旨を分かりやすくするか、以前からその重要性には教育実習のころから感じていたが、改めて感じることができた。

よかったところは「生徒と対話する」ことを意識して授業したせいか、生徒の顔や反応を見ながら授業を行うことができた。そのおかげで授業中に生徒がどんな反応をしているか、参観者とは違う角度から見ることができた。また授業の準備については「やることはすべてやった」と思えた状態で授業を行えたおかげで落ち着いて授業することができた。これらのできたことは自分の自信にもなった。これからもできたことは継続して授業実践していけたらいいと思う。

今回の授業実践では「主題を明確に決めることの大事さ」を学ぶことができた。また主題を決めた後、どのように授業を進めると生徒の関心を集めることができるか、主題に見合った実験を行うことができるか、という「授業参観で何を見ればいいのか」が分かるようになった。今回の授業実践は自分にとってとても大きな学びであった。今後も授業実践を行い、自らの学びをさらに深めていきたい。

見取りを通して、子どもたちから学ぶこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校

魚見 晏那

今年度のインターンシップも既に8ヶ月が経ち、残り4ヶ月程となった。昨年度に引き続き明新小学校でインターンシップを行っているが、今年度はメンターの先生も変わり、子どもたちもほとんどが初対面であった。ほぼ新しい環境の中でスタートしたが、昨年度に比べてインターンシップの回数も週3日となったため、話す時間や関わる時間が多く取れたこともあって子どもたちと関係性を築くのはあまり時間がかからなかった。私がインターンシップで軸としておいているのは子どもたちの見取りである。

気がかりな子と教師、周りの子どもたちとの関わりや授業中の言動などに注目し、どのように関係性を築いているかやどのような発問をしているか、先生の引き出しなど授業構成の主に2つの視点から見取りを行っていた。今回は、インターンシップの中で大きな学びとなった授業実践を振り返り、書き記していきたいと思う。

昨年度はインターンシップの回数の都合もあり、単発の1時間の授業を4回しかできなかったが、今

年度は単元を通した授業実践に挑戦したいと思い、9～10月にかけて初めて単元〈たずねびと〉の授業実践をさせていただいた。授業実践を経験して反省すべき点が多くあるが、メンターの先生と振り返り相談していく中で、授業スタイルについて考え直さなければならなかったと感じた。自分の授業を見つめなおすと、私自身が受けてきた授業の型に当てはめてしまい指示型の一方向的な授業になってしまっていると感じた。そのため、ワークシートを記入していない子どもたちは授業に対する意欲は薄れていたのではないかと考える。以前、子どもたちから「国語はあまり好きじゃない」と聞くことがあり、私自身も子どものころから苦手だったことから、私もそのイメージを払拭したいと考えていたが、教材研究をすればするほど教師の読みが深くなり、「伝えたい、分かってほしい」と思う私の思いと子どもたちの学びとの差ができてしまっていた。メンターの先生のように子どもたちが積極的に参加する授業をするためには子どもたちに沿った授業を行っていかねばならないと実感した。メンターの先生からいただいたアドバイスでは、スタートとゴールは考えておいて、道筋を子どもたちと考えていくほうが子どもたちにとって近いものとなるとおっしゃっていた。今の自分にとって授業は指導案通りにただできていただけである。子どもたちが“主”となる授業を行うためには、どのような発問やワークシート、授業展開が重要になってくるかを自分1人ではなく、子どもたちと共に考え、授業を作っていかなければならないと感じた。

また、授業を構成する上でインターンシップを多く積み重ね、子どもたちから見取ったものが授業に活かされていたと考える。昨年度の授業実践では、気掛かりな児童に配慮してワークシートを作ったが、それは1人を見取っていたからこそできたことである。今年度は、このクラスがここまで理解できるだろうと見通しを持つことで、授業展開を考えるだけで

なく、授業の際にその子の考えに触れることができていた。しかし、中には私自身が勝手に思い込んでいた部分もあり、中には予想を超えてくる子どもたちもいた。それだけでなく、授業で使用したワークシートを見返すと子どもたちの中で大きな差ができていた。今回の授業実践では完全に見取りの力を生かすことができていたかという点と難しい。さらに、このクラスはペアやグループでの話し合いの活動がすごく活発になると分かっていたので、なるべく取り入れるようにするなど見取りから得たものも取り入れることができていた。しかし、発表となるとその活発さは消えてしまうことから、こちらから指名していたが自分の中ではこれで良いのかとすごく悩んでいた。先ほどの述べたように、自分がこんな授業をしたいから指名すると言うように自分の授業に当てはめてしまっている自分がいる。子どもたちがより深く学べるよう、教師として子どもたちの実態をしっかりと把握して、どのような授業がよいのかを考えていく必要がある。

私はこの授業実践を経て、単元の構成の難しさを知った。私自身、専門外である国語の難しさを感じるとともにメンターの先生からのお話も聞いて、“もし次回挑戦できるときはこうしたい”という次への目標も生まれた。今回の授業実践は自分の中では、次につながるステップだと捉えている。それも、メンターの先生から聞いた「失敗した底辺の経験というのが今後の自分にとってとても重要」という失敗を通して次に活かすことが大切だということと、成功だけを知っていると何事もそれを越えようとして難しくなるため、底辺を知っておけば自分の中で少しでもうまくいったと実感が得られる。そういったことが積み重なっていく経験が重要であるため、インターンシップ生である今のうちにたくさん挑戦して、自分の今後活かしていきたい。

過去の自分と向き合う

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市至民中学校

大澤 美貴

インターンシップ先である福井市の至民中学校に配属されてもう少して2年が経とうとしている。昨年度に引き続き、同じインターンシップ校の継続を

決めたのにはいくつかの理由がある。例えば、自分の立ち位置を確立できたことである。当初は「自分はどういう立場で生徒と関わればよいのか」というイ

ンターン生ならではの悩みを持っていた。しかし、多様な生徒と関わっていくうちに、立ち位置というもの意識せず、生徒が求めている対象としてありのまま接するようになった。それが良かったのかは分からないが、今となっては私に話かけてくる内容は生徒によって全然違うが、生徒たちは本音で話してくれるので私が目指す教師像に近づいてきているのではないかと実感している。

また別の理由では、生徒の成長を見届けたいという気持ちである。昨年度は2学年の副担任として配属されていた。そこで関わってきた生徒たちが最高学年になり、どのように学校をつくっていくか後輩たちを引っ張っていくのか楽しみでもあった。昨年とは違った子どもの姿を見ることができるのはとても嬉しいことである。一方で、生徒たちが日々成長している中、自分は何が成長したのだろうと考えさせられることもあった。そのような時は、過去の自身の記録を読み返すことで具体的に何が変化したのかと捉え直すことで、生徒と共に成長できたと感じていた。

3学年になった生徒たちは高校受験を控えることで、全体がより一層学習に取り組む姿が見受けられるようになった。その中で、ある男子生徒と関わる事が多くなっていった。

男子生徒は機械の仕組みや原理などに高く興味・関心を持つ生徒であった。至民中学校の制度では、技術と家庭科が1学期と2学期でクラスが入れ替わる。男子生徒のクラスは昨年の後期に技術があり、その際に授業を通して関わる事が多くなった。その男子生徒は、視野が広く授業内のどんなに些細な内容でも疑問を持つ。そして、授業後に私にその疑問を投げかけさらに学びを広げるというやり取りを何回も行いうちに、インターンシップ日の昼休みは男子生徒との質問会が習慣化していった。

男子生徒の疑問はいつもおもしろいものばかりで、ジェット機のエンジンの仕組みやQRコードの仕組みなど普段何気なく使っているモノや目にするモノからが多かった。どれも技術に関係することではあるが、男子生徒の突拍子もない疑問に恥ずかしながら私は答えられない質問がいくつかあった。その時の対処として、昔の自分であればきっと「教師である以上、何かしら答えなければならぬ」という想いから自分の持てる知識内で当たり障りのない回答をして

いたと思う。しかし、男子生徒との関わりによる心境の変化から素直に「分からない」と言ってもいいのではないかと考えるようになった。このように、教師は常に答えを知っていなくてはならないという固定概念を捨てることができたのも、私の成長の一步だと感じる。私はよく男子生徒に「着眼点がすごい。この時間は先生も勉強になる」ということを伝えている。男子生徒は嬉しそうに「じゃあ来週は〇〇について教えて！」と次から次へと疑問を持ってくるため、その気持ちを大切にしていきたいと思う。

私は教育学部のときから「教科（特に技術）を好きになってもらうにはどうしたらよいか」という疑問を抱いていた。大学院に進学し、インターンシップでより深く子どもと関わることで技術を嫌う子どもと直面することも多く自身の悩みはますます大きくなった。上記の男子生徒のように趣味の延長線で技術により興味・関心を持つ生徒は自ら探究心を持って学びに向かっていくが、全く興味・関心すら抱いていない生徒を教科と向き合わせるにはどうすればいいのかインターンシップを通して解決策を探っていた。

男子生徒と関わる中で、教科に興味・関心を持たせるにはまずは身近なことについて取り上げ疑問を持たせることが重要になってくるのではないかと感じた。何事でも自分の経験や体験を振り返りながら物事を考えるとイメージしやすい。その経験や体験を大切にすることが教科の学習にとって重要なのではないかと考える。特に技術という教科は身の回りのことから話を広げて学ぶことができる教科であると考ええる。

それらを踏まえて数回に渡り授業実践を行ってきた。授業実践をするにあたって、私が大切にしていることは自分の経験から考えられる導入にすることである。しかし、その導入をどのように授業のメインや授業のまとめへとつながりのある授業展開にしているかが今の自分にはまだ足りていない力ではないかと感じる。自分の実践してみたい授業はあっても、生徒が自ら学習を深めていくような授業の流れにするには教材研究や自身の授業力を延ばしていかなければならない。これらは簡単に身に着くことではなく、教師という道を進んでいく以上一生続くものではないかと感じる。大変な時もあるかもしれないが、自分を高め続けるためにも大切にしていきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

Reflecting about Team Teaching; How can we achieve balanced team teaching?

ミドルリーダー養成コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

Tancio Virna Christine Almazan

Team teaching happens when a certified Japanese teacher of English is paired with a native English speaker to teach English classes in tandem at public and private schools at all levels across the country. The idea is to have the students benefit from the teaching experience of a trained Japanese educator and gain practical experience using the language from a native speaker. (Soda, 福知山公立大学研究紀要(2018)) The hope of bringing native English speakers into the classroom is to develop students' motivation to use the English language to communicate and to heighten their interest in other cultures and international understanding. Ideally, these are the expectations most especially from the ALTs. They have the responsibility to keep the classes entertaining and informative, as the 'language informants' and 'intercultural informants'. Yet, problems often arise in team teaching, mainly because it 'has neither an established method nor principles which teachers need to follow' (Shimaoka, Yashiro 1990: 23).

From the last two monthly conferences, I was graced to be in a group with JTEs, one at one of the schools in Fukui and one as a former JTE who is now working at the Board of Education. I had the chance to actually hear their perspective working with an ALT in the classroom. It was one of the most interactions I had that was open, free and we listen, not hear, but listen to the messages we all were trying to convey. In our discussion, there was this point of view that made an impact. One of the teachers shared, *"In some schools or some areas, ALTs know a lot of things than the young teachers, so we (Japanese) teachers should throw away such pride... some Japanese teachers think that we must do everything. Even if I (Japanese teacher) can't do English but I have to do everything..... for example in the role of teachers (ALTs and JTEs) in class, especially in the team-teaching class. ALTs are main teacher, I think. JTEs bi-player, As a supervisor, I told the JTEs to make a team-teaching class. And this is the only*

way, ALTs are the main teacher and the JTEs are second teacher like a T2.....and if you can ask your principal to approve the idea to have a regular meeting with your teachers". As I listen, I was not convinced and got stuck on his idea on what team teaching is yet I cannot deny that this is the reality. That to some team teaching still means someone has to be the T1 and T2. The goal is neither to discriminate the teachers nor to determine who should only be the main teacher in the English classes. The goal is for both to be able to work together, find the strengths and make the best out of the two teachers, that they are assets, and good resources. Not to replace nor remove anyone but appreciate that it is a unique learning experience that students are graced with two teachers in the class whom they can learn from. A simple example for that is when the ALT is explaining with regards to the rules of the activity, the JTE could list down what the students should do on the blackboard. The students are free to ask any of the teacher support when they are struggling, and so on. Both the teachers should learn how to collaborate in the classroom by sharing tasks.

There is no doubt that team teaching can be a powerful tool for expanding the roles of ALTs in schools. When done correctly, team teaching can provide students with a more holistic learning experience that. Additionally, having multiple teachers in the classroom can ensure that each student gets the attention they need to succeed. However, the success of a team teaching model depends largely on the strength of the partnership between the two instructors involved. For this reason, it's important to develop a collaborative relationship from the very beginning. When working together, it is important that the both teachers involved are respectful of each other's strengths and weaknesses. In addition, the team should strive to work together to create an optimal learning environment for their students. Here are a few ways that can help get the team started on the right track.

Communication is the key to a successful team teaching environment. Each member of the team will need to be aware of the other's lesson plans and assignments to ensure that there are no scheduling conflicts. Likewise, it's important for the team to discuss student progress on a regular basis to develop a plan that ensures student success. In addition to regular meetings, it may be helpful to develop a written lesson plan outlining the goals of the lesson and the responsibilities of each instructor. By keeping lines of communication open, the team will be able to resolve any issues that may arise quickly and avoid interruptions to the classroom flow.

Another important component of a successful team is a common goal. The goals of the teaching team should be clearly defined so that everyone is on the same page. If the goals are not clearly defined from the beginning, it can be difficult for the team members to reach a consensus when they are confronted with unexpected obstacles. For example, if one of the teachers believes that group work provides a great learning opportunity for the students but the other teacher does not feel the same way, the team will need to resolve the issue to come to a compromise that suits the needs of the class as a whole. Having clearly defined goals can also help the team focus on the needs of their students instead of their own personal preferences.

Finally, a team teaching environment requires mutual respect and support among the members of the team. This

is particularly important when it comes to dealing with issues that may arise in the classroom. When the different opinions of the team members conflict, they will need to set aside their differences and work toward a solution that benefits the students. To be successful in a team teaching environment, the team members must work as a team to create a positive learning environment for the students.

When developing a curriculum for a team teaching environment, it is important to keep the needs of the students in mind.

Each member of the team should develop lessons that address the needs of all students in the class and create activities that will engage them in the learning process. The team should also work together to come up with flexible lesson plans that can be used in a variety of different settings. Creating a team teaching environment can be a rewarding experience for teachers who feel that they would benefit from additional input or support in the classroom.

It doesn't matter what our methodology, or our techniques in teaching but if we share the same purpose, a common goal, it will help us find ways to work together.

As educators, how can we grow together?

学びと実践の往還

ミドルリーダー養成コース1年履修/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

兼井 智加

わたしは、現任校に赴任して5年目の春、教職大学院で学ぶ機会をいただいた。7年生(中学1年生)から持ち上がった子どもたちがちょうど卒業したばかりというタイミングで行われた初回の合同カンファレンスでは、3年間、自分が担当してきた「社会創生プロジェクト(学年プロジェクト)」の実践の歩みを省察したいという思いを熱く語らせていただいたことを覚えている。さらに、そのときファシリテーターだった大橋巖先生からは、「3年間の実践で学んだことを、ぜひ次の学年の活動に生かし、それを長期実践としてまとめてみることもできる」という貴重なアドバイスもいただき、やる気に胸が膨らんだ。「担当者として支えられていた側から経験者として支える側に・・・」しかし、新たな学年に所属して実際に

関わってみると、「支援する」ことがいかに困難なことであるかということがわかった。自分の言動が子どもたちの自律(自立)の機会を奪ったり、担当者の顔を曇らせたり、マイナスに作用していることも多いのではないか。新たな学年のコミュニティの中で、自分自身の役割を暗中模索する日々を過ごしていた。

そのようなわたしに転機を与えてくれたのが教職大学院での学びだった。特に、夏期集中講座では、一つ一つのサイクルに深い学びがあり、Cycle3が終わったときには、3つのサイクルすべてがつながっていたような感覚に浸ることができた。Cycle1では『専門職として学び合う教師たち』の中から、現任校の教員でいらしかった小林真由美先生と高橋和代先生が書いた実践記録を読んだ。勤続年数を重ねる

ごとに深まる両先生の学校や子どもたちに対する思いの変遷は、そのときの自分に重なる部分が多々あり、背中を押してくれているかのように感じた。続く Cycle 2 では、E.H. シャインが著した『プロセス・コンサルティング』を読み、「支援する」という行為を具体的に読み解くことで理論と実践がつながり、相手と自分の間にある様々な心理的状況の複雑性に触れることができた。最後に、Cycle 3 では4月からの社会創生プロジェクトにおける実践をもとに、効果的な教師の支援のあり方について考察し、文章にまとめた。教職大学院の学びは、多くの方々がこの News Letter でも記しているとおおり、自分の実践や思考を自分の中だけにとどめず、他者に語ることでさらなる広がりや深まりを感じることができるところによさがある。予測困難な未来を主体的に生きる力をつけるための教育が求められている今、子どもと教師の両者が学びのゴールやビジョンを描き、それを対話によって共有していくことが重要であるという自分の考えを伝えると、ファシリテーターの小林真由美先生からは、子どもたちと教師が協働で社会創生プロジェクトの最終目標を見つけるための会議

を開いてみてはどうかというより具体的な提案をいただいた。子どもたちとの話し合いの場から、教師が効果的な支援のあり方を学ぶという新しい形を想像し、わくわくする自分がいた。その後、子どもたちと教師による会議は、秋休み中に実行された。わたしはオンラインによる参加になったが、これからの社会創生プロジェクトについて語りたい子どもたちと学年の教員が集まり、小グループに分かれて行われた。そこには、子どもたちのファシリテーション力を高めたいという担当者の願いも込められた。

この9ヶ月間を俯瞰的に捉えると、まさに、教職大学院での学びと学校現場での実践が往還し、コミュニティの醸成にも影響を与えていることが実感できる。同時に、教職大学院が始まった当初とは長期実践研究報告書に表したいと思うことも、少しずつ変化していることにも気づく。教職大学院生としての残りの時間もあとわずかになってきたが、ここからが佳境。教師としての明日の自分に変化を与えられるような、そのような長期実践研究報告書を書いていきたい。

教職大学院での学び

ミドルリーダー養成コース1年/高浜町立高浜小学校

今井 悠介

気づけば教職大学院での学びも1年のまとめの時期に入ってきた。教職大学院で何を学び、どんな方向に進んでいくべきか、明確なものが自分の中にないまま今年度のスタートを切ったが、学校現場での仕事と平行しながら、毎月のカンファレンスや夏期集中講座などで他の院生と語り合ったり他の実践の取り組みから学んだりする中で、新たな知識を得るとともに新たな視点を持てたように思う。取り立てて特別な実践を行うことはできていないが、学級での取り組みや同僚との協働の中で、自分の実践を方向づけたり価値づけたりしながら少しずつ歩んでいる。

今年度取り組んでいる実践に、「コドモノアスケン」がある。6年生の総合的な学習の時間に、地域のまちづくり有志団体「高浜明日研究所(アスケン)」と連携を図り、地域の課題解決に向けて取り組んでいる。高浜町は人口減少が進んでおり、2040年には町が成り立たなくなるかもしれないという問題に直面している。その人口減少に歯止めをかけるべく、高浜小版

SDGs を作成して、高浜町の未来のために自分たちに行うことを実行していこうという取り組みである。現在は、自分たちが考えた地域の資源を活用した商品案の中から採用された、地域で作られているレモンを丸ごと活用したレモンゼリーと、捨てられていた紫蘇の葉で染めたコースターの商品開発を進めているところである。このような実践を年間通じて行っているが、子どもたちにとって、この実践が表現力をはじめ様々な資質・能力を培うことにつながっていることを実感している。そう確信できているのは、教職大学院での学びが土台となり、実践への価値づけができるようになったからだと考えている。

今年の夏の集中講座では、福井大学附属義務教育学校の実践記録を読んだ。3年間のカリキュラムが確立された中、自分たちで創り上げる学年プロジェクトを通して、「問い」の発見から「省察」まで長い時間をかけて力を培っていく過程を読み取ることができた。また、子どもたちが学年プロジェクトで培わ

れた力を、各教科、その他あらゆる場面において発揮し、相乗的な効果をもたらすことで学びが深まっていくことが理解できた。表現の場が意図的・計画的に設定されていることにより、聞いたり調べたりして得た知識に加えて、表現力、他者意識、企画・運営力などを含めた総合的な力が必要になり、必然的に学びが深まることになる。この表現の場の設定は、協働探究を進める上で極めて重要なポイントであると考えた。この、「問い」を自分たちで作っていくこと、表現することで様々な力をつけていけることは、コードモノアスケンの活動でも意識していることであり、進んでいる方向が間違っていないことを確認できた。

また、「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、実践コミュニティの形成やその重要性を学んだ。これからの社会において、知識をどのように共有し、組織を発展させていくかのカギは、実践コミュニティが担っているということが理解できた。また、その育成や発展のためには原則が存在し、その原則に沿ってアプローチすることで実践コミュニティを大きく発展させることができることへの理解を深めた。しかし、それは形式的なものではなく、あくまでそのコミュニティの成長・発展段階に応じたアプローチが必要である。そのために、コーディネーターの存在

や働きが重要であることも学んだ。コミュニティ・オブ・プラクティスから、コードモノアスケンの活動の発展へのヒントを多く得た。

このような学びと自分を重ね合わせてみる。コードモノアスケンの活動では、相手意識を明確に持ち仲間と協力して表現を実現する力、その過程の中で合意形成を図る力などの育成に寄与していると感じている。SDGs 発表会や商品提案プレゼン大会では、いかに相手の心に届かせるかということを意識する表現の場を設定した。この場を最大限に活用して、表現力の育成ができたのではないかと考える。これから活動を継続し、子どもたちが学びを深め様々な力をつけていくことを目指したい。そのためには、教師が長期的ビジョンを持って学習をデザインするとともに、目の前の子どもたちをしっかりと見取り、興味・関心から生まれる主体性を大切に活動を支えていくことが重要である。また、子どもたちを適切に支援していくためには、教員集団の意識向上（変容・改革）や協働体制づくりが不可欠である。目の前の子ども達を見取り、じっくりと時間をかけて子どもの問いへの探究を支えること。そして、何より私自身が協働探究し続けるということを大切に、実践を継続していきたいと思う。

東京ラウンドテーブルから学んだこと

ミドルリーダー養成コース2年/立教女学院中学校・高等学校

堀井 優

驚くほど速いスピードで月日が過ぎ、教職大学院での学びも残りわずかとなってしまいました。少し前に2年生になってしまったと思っていたのに……。忙しくも充実した日々への満足感と、修了後への不安とが入り混じった複雑な気持ちが感じられるこの頃です。

振り返ってみると、2年生になってからの学びは非常に充実した時間だったと感じています。特に、先月開催された東京ラウンドテーブル2022にコアメンバーとして参加した9月からの3ヶ月は教職大学院の学びの中でも特段大きな学びの時となりました。昨年度の東京ラウンドテーブルでもコアメンバーではありましたが、2年目の参加として、より深く関わったことで大きな学びが得られたと感じています。毎週のように行われたミーティングでは、開催に向けて、テーマ・目的の設定や、担当者として制作した

チラシ作りなど、細部に渡り検討を進めて来ました。目の前の学校の仕事をこなしながら、同時にサテライトの先生方と連絡を取り合い、企画する営みは骨の折れる作業の連続でした。一つ一つのことを決める度に、運営力、コミュニケーション力、判断力が問われ、多くの検討事項や課題に悩まされた時期もありました。参加者の学びはもちろん、院生として私たちの学びと両立させるにはどうしたら良いのか？様々な立場や視点から検討し判断していく作業は難しいことばかりでした。また、同僚ではなく、学校も地域も役職も全く違う先生方と一つの物を作り上げていくことは、物理的な距離感も含めて本当に大変でしたが、他では決してできない貴重な経験をさせていただいたと思っています。実際に研修会を開催するプロセスを体験することができただけでなく、一つの組織がどのように成り立っていくのか、細や

かなコミュニケーションがどれほど重要なのか……。当日ご講演いただいた荒瀬先生のお話の中にも、まず言葉の定義と共有を整えてから進めていくことが大切であるとおっしゃっており、いかにそれが大切なことかを大きな実感と共に学ぶことが出来ました。また、夏期 Cycle で読んだ書籍「コミュニティ・オブ・プラクティス」や「学習する組織」が頭の中を行ったり来たりしながら、これまで考えたことのなかった“組織”について考えることができた時間にもなりました。悩みと忙しさの中にも大きな充実感と達成感があり、仲間と協力しながら物を作り上げていく楽しさや、青春のような感覚も傍で味わいながら過ごした3ヶ月でした。

そして、今回のラウンドテーブルの企画・運営と本番当日までの一連の期間を通して、大きなテーマとなっていた“つながり”について、私自身が探求できたのではないかと感じています。東京サテライトの先生方とのつながり、自分の周囲の学び合うコミュニティとのつながり、そして勤務校では同僚とのつながり、生徒とのつながり、学外とのつながり。こ

のラウンドテーブルを開催する過程と当日のセッションを通して、様々なつながりを体験したり、考え振り返ることが出来ました。他者とつながりを持つことで自分の成長の幅が広がることや、生徒の学びの可能性が広がることに改めて気づき、子どもがより豊かに生きる上で必要な力は、他者との関わり方や社会性といった力なのではないか。とても重要で、育むべき力なのではないか、と感じるようになりました。

東京ラウンドテーブル開催に至るまで約3ヶ月間、福島先生をはじめとする東京サテライトの先生方、教職大学院の先生方、参加者の方々等、本当に多くの方にお支えいただき、大きな学びの時を過ごさせていただき、心より感謝申し上げます。私自身も数ヶ月後、教職大学院を修了した後に自分自身が成長し続けられる“つながり”を作り出していけるのか、考えていかなければいけないと感じています。また、目前に迫る長期実践報告への不安は大きいですが、最後まで精一杯自分と向き合い、学びの時間を楽しみたいと思っています。

自分の実践を見つめアップデートする

学校改革マネジメントコース1年履修/福井市教育委員会
西片 善江

教職大学院での学びを志してから1年余りたった。予想はしていたものの、正直忙しい一年になった。月ごとのカンファレンス、ラウンドテーブルや夏期集中サイクル×3とプログラムはどんどん進み、一年履修の私に与えられた学びの時間は残り数か月となった。教職大学院で、私の「学び」ということの意味が大きく変わった。教育に携わるものとしての捉えが変わったことはもちろんだが、学習者として「学んでちょっと苦しい、学んですごく楽しい」を味わわせてもらっている。以前、学生だったころは思わなかったのに、違いについて考えてみたい。

大学生のころの自分は、テーマ（青年心理学）についての研究や教職のための単位取得を頑張っていた。関係する文献を読んだり、レポートを書いたりした。また、実験や調査にも取り組んでいた。知らなかったことを新しく知ることやできるようになったことが楽しかった。グループで一緒に研究を進めることもあったが協働の意識はあまりなかったように思う。

当時の私の学びは、「与えられた課題を解決すること」、「知識や技能を獲得すること」が中心だった。そして、純粋に興味や関心があることについて知りたいという思いが学習への動機だった。全く残念なことに、私は大学での学びが何かにつながるのか、つなげていこうとかは考えていなかった。楽しさは限定的で、広がりや深まりはなかったのだと思う。

当時と現在の違いの一つ目は、学びに対する動機が主体的であることだ。学習観の転換に基づく学校改革の必然を感じて、「何かしなければいけない。でも、何ができるだろうか」と焦っていたことが、私が教職大学院で学ぼうとした動機である。子供たちの学びが変わるなら、学びの場である学校や教師がどう変わればいいのか、答えを探したいと考えた。

二つ目は、学び方の違いである。当初は、経験や職種・職といった背景が異なるメンバー構成や語り合うという形式には驚いた。しかし、この形がとてもいいことはすぐに理解できた。

まず、目的が同じであることとメンバーがフラットであることが話しやすい環境になっている。また、ファシリテーターの先生のおかげで安心して話せる。考えを追いながら語り、丁寧に聞くことで自分の考えが再構成されたり、新しい視点からとらえ直したりする過程は、私にとって「学びってすごく楽しい」になった。反対に誰かの役に立てることもうれしい驚きだった。特に院生の皆さんの、現場の問題点の鋭い指摘や若い教師として感じる悩みは、私にとって新しい視点になっている。学校や先生を支えることや教師の学びや成長を考える行政職としての自分の役割についてヒントを与えてもらっている。

また、「コミュニティ・オブ・プラクティス」、「学習する組織」、「学校を変える力」などを集中して読んだことも大きな気づきになった。職場では、教科指導、学級経営やコーチングなど実践に役立つような本を読むことが多い。学校の意味を問い直したり、そもそも組織とはと原点を考えたりするような本を手に入る機会はなかった。さらに、一人で読むのではなく、読む過程でも多様なメンバーと語り合ったこと

は、読みを多角的にしてくれた。語り合う学び方は、対話的な学びの本質を実感させてくれた。

三つ目の違いは、学んだことが自分の経験とつながり、取組みを繰り返していくということである。私が日々の仕事の中でなんとなく感じていたことや考えていたことがはっきりとした形になった。例えば、教師としての私が大切にしていたことの一つが同僚性を高めることなのだが、私は自分の経験から、これが大切だと考えていた。著作を通して研究者の考えに触れることで「なるほど、そういう意味があったのか」と裏打ちされた。意識して同僚性を高めていく手立てを取り入れるようになった。

教職大学院で、私は「主体的・対話的で深い学び」を実感させてもらっている。いつの間にか長くなっていた教員としての実践を省察する過程は苦しさもあるけれど、自分の経験を学び直して深める楽しさや新しい目標を得ることができた。しかし、まだ道半ばである。アップデートした自分にできることは何か、これからも問い続けていきたい。

巻き込むから、つながる、そして任せる

学校改革マネジメントコース1年履修/福井市一乗小学校

堂下 行浩

10月のカンファレンスでのこと。「先生は、学校の様子を本当に楽しそうにお話ししますね。」ある先生から、そのような内容のことをおっしゃっていた。そう、今、学校に行くのが楽しい。よしっ、今度は子どもたちとこんなことをしてみよう。あれも試してみようかな。こうすると、先生方はどう考えるだろう。院で学んだことを、考えたことを実践する楽しさ。たとえ、上手くいかなくてもそこからまた考えて新たな試みを試すのがおもしろい。そんな楽しさに気づかせてくれたのが、まさに院での学びだった。カンファレンスでの校種も立場も違う人たちとの「語り」。当たり前だけど、人によって思いや考えには違いがあって、だからこそ気づきがいっぱいあって、そして私自身自分の実践を振り返り自分の考えを整理することができる。何より、こんなにも真剣にそして、意欲的に教育に向き合っている仲間がいる。これが私にとって大きな励みであり、喜びである。これまでに、こんなにも真正面から自分の実践を振り返ったことがあったのだろうか。カンファレンスや

集中講座では、実践の振り返りだけでなく、長期実践研究報告書や理論書を読んで分かったことや考えたことも話し合う。ああ、学校という組織を動かしていくには、自分の担当する仕事だけをしていてもだめなんだな、もっと一人ひとりが学校全体を見る、知ることが大切なんだ、ということを『学習する組織』（ピーター・M・センゲ著）から学んだ。長期実践研究報告書で、教師が学び合うためには、仕掛けが必要だということも知った。私の研修テーマは、「教師や子どもたちが学び合い、学び続けるコミュニティを支える」こと。教師や学級の子どもたちが、学び合い、学び続けていくにはどうすればいいのだろうか。ただ、声高に「みんなで学んでいきましょう」と言ったところでみんなが学び続けることは難しい。学ぶことは大切だと分かっている。秋に行われた体育大会で、1年生から6年生まで全校が運営に関わる場を作った。中学年が開会式を取り仕切る。開会宣言を4年生の男の子が少し照れながら宣言する。低学年が開会式を。2年生の女の子が、たどたどしくも成績を発表

する。高学年が、声を張り上げて応援に取り組む。コロナ渦で、競技数が減ったはずなのに子どもたちは、以前よりも意欲的に見える。自分たちで作上げた体育大会だと感じているからではないだろうか。するとどうだろう。担任の先生も、「先生、開会式ですが、こんな風にしてみたいのですが、どうですか？」と体育主任の私に聞いてくる。えっ、うれしい。今まで、自分の学年の競技のことしか考えていなかった担任の先生方も積極的に？関わってくれるようになった。職員室でも、先生方との会話が増えてきた。先生方の体育大会への思いも知ることができた。体育

主任として、体育大会は私が全てを取り仕切らなければいけないと思っていた。子どもたちが、先生方が、仕事は増えているはずなのに、以前よりも意欲的に取り組んでいる。もっと、子どもたちを、先生方を信じ任せよう、と感じた瞬間であった。体育大会が楽しい。いつもよりももっと。こうした実践は、まだまだ始まったばかり。次はどんなふうに取り組んでいこうか。カンファレンスで仲間と語り合い、自分の考えを整理して、そして、現場で実践していきたい。そう考えると、残り少なくなってきた大学院での貴重な学びの場がなんだか、さびしい。

「子どもの学びに伴走する教師集団を目指して」

学校改革マネジメントコース1年／沖縄県教育庁宮古教育事務所

本村 税

福井大学教職大学院での学びも9ヶ月が過ぎ、大学院生活の折り返し地点へと差し掛かった今、これまでの月間カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座やオンラインによる院生同士の交流を振り返って、充実感と自身の変化を感じています。同時に、今後大学院での学びの集大成としてのさらなる能動的な学びを展開していかなければならないといった自身へのプレッシャーをかけているところです。

学校での子ども達の学びの形や質が変わり、進化していく中で自身の教師としての姿がどうあるべきか悶々としていました。そのような中で今年度初め、福井大学教職大学院への入学が決まると同時に、これまでの職場が学校現場から教育行政へとガラリと環境が変化したことは、自身の中での大きな変化、転換期がやってきたのではないかと予感させるものでした。(月々のカンファレンスで訪れる東京と沖縄宮古島の物理的な距離感、対面やオンラインでの大学教員や他の院生との交流を通して感じる心理的な距離感がこんなにも近いものかといった認識の変化はすぐに感じることができました。財布の中身の変化も少なからずありましたが(笑))

連合教職開発研究科長の柳澤先生が年度当初におっしゃった「子どもの学びは教師の学びの縮図」「教師は子どもの学びの伴走者」というこの言葉は、これからの教師としてのあり方、揺るぎない方向性を見出させるものでした。同時に教師の学びとは一体何なのだろうか、という問いが頭をよぎったのも束の

間、入学式後に行われたカンファレンスで大きな手がかりを得ることができました。理論書や、教育実践書を読み込み、専門的な知識を蓄積していくことはもちろんですが、ラウンドテーブルを通した校種や環境は違えども、組織をマネジメントする立場の他の院生との話し合いや情報交換は、これまで私自身が持っていた学びの概念を大きく変化させるものでした。自身が抱える悩みや疑問を互いに出し合い聞き合う中で、共感しながら互いが持つ豊富な経験を語り合い、解決への糸口を見出していく、その過程そのものがまさに学びであると感じた瞬間でした。また、大学の先生方の絶妙なファシリテーションはこれからの学びを創造していく教師の立ち位置としての重要な要素だと感じました。

カンファレンスやラウンドテーブルを通して、先人達の教育実践の追体験、自身のこれまでの実践の省察を繰り返しながら、今後求められる教育のあり方、学校組織のあり方などに関する理論的な学習に加え、自ら学びを続ける他の院生との交流が自身を刺激するものであり、学びの原動力となっていることを実感しています。未熟ながらも、このような学びを多くの学校現場の教師にも広げたいという意識が日々の業務の中でいつも頭を巡っている状況です。

去る8月には、コアメンバーとして地元宮古島でラウンドテーブルの開催に関わり、宮古島の教員と参加できたことは大きな収穫でした。開催直前になり、コアメンバーの一人が体調不良による不参加が

余儀なくされ、急遽、メンバーの玉突きで本番の司会進行を任されることになりました。司会という大役を拝命し、「玉突き事故は何が何でも防がなければ」との不安もありましたが、宮古島でのラウンドテーブル開催に大きな関わりを持てたことは、大きな充実感、達成感につながるものでした。また私と同グループの地元出身のある参加者は「実際にテーブルについて話をするまでは、全国各地から来た大勢の教師との交流が不安で恐縮していたが、たくさん話を聞き、自身の状況を話せたことに大変満足している。参加して良かった。」との感想を述べていました。そのような参加者が少しでも増え、体験したことを周りに紹介し、繋いでいくことで新たな学びの裾野が広がっていくものだと期待が持てました。

教師の主体的な学びが回り巡って、学校の子供達の主体的な学びにつながっていくことを、教師一人

ひとりが認識し、何より、持続的な学びとなるよう教師自身が楽しみながら学ぶことが大切であること、そしてこのラウンドテーブルは、その学びの可能性を大いに含んでいるということを確信に変えたラウンドテーブルでした。

インプットからアウトプットまでを一つの学びと捉え、指導主事として何ができるかいうことを念頭に、福井大学教職大学院での新たな学びを土台として、先輩主事の力を借りながら学校現場の教員へのアプローチ、研修のあり方に変革を起こしながら、学び続ける教師集団、子どもの学びに伴走する教師集団づくりに少しでも役に立てたら、という思いで邁進していきたいと思います。

「教職大学院で得たもの」

学校改革マネジメントコース 2 年/敦賀市立中央小学校

瞿曇 俊雄

私は、30 年ほど敦賀市で理科の教員を務め、今年度初めて小学校に教頭として赴任した。中学校教員時代に様々な校務分掌を経験させてもらい、この仕事はこの校務分掌が担当するということがよく分かるようになっていた。教務主任の経験も長かったため、学校全体の運営を滞りなく進めるための流れもつかむことができた。今年度、小学校に異動となり学級担任制や子どもへの関わり方など、中学校とは大きく異なることが分かってきた。今までの中学校経験から得たスキルは使えないことが多くある中で、管理職としてどのように動けばよいのかが見いだせず悩むことが多い現状である。そのような中、教職大学院でのカンファレンスやラウンドテーブルは、私にとっては大きな心のよりどころになるものである。特に、カンファレンスで小学校の教員と同じグループになるとその学校の実情、各先生の思い、職員同士の関係などがよく分かり、非常に参考になる。また、オンラインでの受講なので、他県の方が多くそこも大変興味深い。

また、この教職大学院の受講を通して気づくことができたことがある。それは「視点の違い」である。このニュースレターを書くにあたって、教職大学院

での過去の自分の記録を見直してみた。1 年目は中学校教員（教務主任）、2 年目は小学校教員（教頭）であるが、1 年目は業務改善にむけて一生懸命になっていたため、カンファレンスでは「労力対効果」についてよく話題をあげていた。2 年目は、「教員の資質向上」についてよく話をしたり、講義についてもその視点で聴いたりしている。この視点の違いは、立場の違いから生まれてくるものだと思うが、その立場になるとどうしてもその視点でしかものを考えられなくなる。カンファレンスでは、老若男女、異業種、経験の長短など様々な視点からの意見を聞くことができるため他の視点に気付くことができる。教職大学院に入学していなければ、おそらく一つの視点でしか物事を考えられなかっただろうと思う。この「視点の違い」の気付きは、過去の自分の記録を振り返ってみることで初めて分かることである。省察という言葉が大学院の中ではよく使われているが、今回、自分の書いた記録から学ぶということをやってみて、まさしくこれが省察にあたるのだらうと実感することができた。自分の思いや考えを記録し、後に振り返り、自分のこれからの糧とする機会は自分自身で作り上げることは相当難しいように思う。難しいこと

ではあるが、学び続けるということはそういうことなのかもしれない。

大学院で紹介された過去の長期実践報告を読んでも、まさしく学校を改革するような実践を行っている先生ばかりである。教育に対する強い情熱、周りを巻き込んで改革を進める行動力、それまでの経験から証明される信頼、すべてにおいて完璧な先生であることが推測される。自分はそのような人間ではないが、それでも何かできることはあるはずだと思いつつ小さな挑戦を試みている。その小さな挑戦をしてみようと思える支えとなっているのが、この教職大学院である。今、入学してから1年と9ヶ月が過ぎようとしている。あと3ヶ月ほどしかないが、まだまだ吸収できることはたくさんあると思うので、食欲に求めている。

学校改革マネジメントコースの「改革」についてよく考えることがある。辞書では「不完全なところをあらためかえて、よりよいものにすること」とある。激しく変わりゆく社会の中では、この「改革」は常に意識しておかなければならないもののように思う。また、反面「持続可能」という言葉もある。どちらも大切な意味を持つ言葉であると思うが、この大学院に参加し、いろいろな方と接する中で、ほとんどの方は「改革」の精神を持ちながら教育活動に当たっていることを感じる。そして、それが今の私を前に動かしている力の一つとなっている。大学院も修了するときにやってくるが、ここでともに学んでいるときのモチベーションを修了後も失わずにいたいと思う。



月間カンファレンス報告

他から自を知り、過去から先を見る

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市安居中学校

八十川 竜馬

4月から長期インターンシップとして安居中学校に通い始めて7か月、生徒だけでなく教職員の方々とともに良い関係を築くことができ、日々の学びはより濃くなってきている。ここでは11月の合同カンファレンスについて述べていくことになっているが、今回のカンファレンスには「他校の研究から学ぶ」と「自分自身の実践の挑戦を語る」という2つのフェーズがあった。以下、特に考えさせられた「他校の研究から学ぶ」で得られた学びと視点を軸に話を進める。

まず、町田市立武蔵岡中学校の内村佐保莉先生から、他校の研究から学ぶこと、他校の研究を支えることの意味についてお話をいただいた。内村先生の実践から、初めはうまくいかないことが多い環境から、他校の研究の姿を見て学んだことを反映したことで、組織全体が変容しより良い方向に向かっていった実例を知ることができた。他校の研究から自分たちの

研究をよりよくしていくという視点は、正直この時まで持ったことのなかった。

その後、内村先生の実践を足掛かりとしてグループでの話し合いに移った。ファシリテーターだった清川先生は清川メッキ専務の方で、会社を運営していくうえで重要な視点をいくつも紹介してくださった。それらは教育現場でも同様に重要視されていることにほとんど対応させることができた。会社の理念から目標を立て、目標を達成するまでの手立てを考えていく過程は、学校の教育理念から研究主題を設定して、授業や学級経営等に反映させていくために具体的な計画が立てられていくものと同じである。他社の失敗・成功・挑戦から自社の進もうとしている道が適当であるか、新しく取り組めることがないかについて吟味していく話は、まさに他校の研究から学ぶという視点につながってくる。

ではここで「他から学ぶ」について私なりに感じたことを述べていく。会社、学校問わず他から学ぶ際、

良い/悪い、上手/下手など、どのような話をするうえでもある程度の論理性や正当性を求めた場合、基準となるものと比較する必要がある。1つだけを見て進めていこうとしても、比較できるのは現在と過去という部分だけにとどまってしまう。すなわち、自分の場所しか見えていない状態では、多角的・重層的に深く話をすることができない状況にあるということである。さらに清川先生のお話から発展し比較対象として、失敗例—自分（組織）—成功例の三者関係が話題になった。研究報告や今回のカンファレンス冒頭の研究実践例は、ある手立てで進めていった場合にどのような良い変化があったのかを知ることができ、活用・応用していくことができるが、どう動く悪い影響が出てしまうのかということとは知りえない。

では失敗例とどうやって自分を比較するのか。その手段の1つとしてはまさにこのカンファレンスがあると私は考えている。今回でいえば午後から話し合った自分の実践を語る際に、「今〇〇に悩んでいて…」「〇〇したけどうまくいなくて…」と現場で奮闘されている方々から悩みが出てくる。その悩みに

ついて、聴いている人が「自分だったら…」と自分事として捉えて解決策と一緒に考えていく。この自分事として考えている時に失敗との比較を行っているのではないだろうか。ある目的に対してアプローチをしたが、上手くいかなかった。であれば他に自分だったらどうアプローチするだろうか、といったように比較しながら考えているのだと感じている。

話はまとまり切っていないが、このように私は今回のカンファレンスを通して、他から学ぶ価値と現在行っていることの捉え直しができたのではないかと思っている。なんとなく意味があるな、将来に役立つなと感じているだけよりも、この活動にはこんな意味や価値があると具体的な解釈がある方が、自分の学びに変えられることが多くなるはずだ。今後のカンファレンスでも、周りの人の話から私自身も多くを学んで、自分の進んできた道やこれから進もうとしている道を見つめ直していく機会にしていきたい。

+1を繋いでいく

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高等学校

立石 虎太郎

教職大学院に入学し早くも2年が経とうとしている。あと3ヶ月ほどで卒業というところだが、今回の11月の月間カンファレンスで「他校の研究から学び、他校の研究を支える」ことの話提供提供者として教職大学院の院生の取り組みを発表させて頂いた。発表自体、大変貴重な経験となったが、発表の資料を作成するにあたり、自身の今までの学びを振り返る大変良い機会となった。

自分たちストレートマスターが昨年先輩方から引き継ぎ、そして今年行ってきた学びの中で共通することがある。それは今までの学びに「+1」する形で学びを歩んできたことである。インターンでの経験に「+1」をして実践を作ったり、他の院生の取り組みをカンファレンスで交流する中で、その取り組みに「+1」してみたり、さらには自身の取り組みが誰かの「+1」の土台となったりなどである。

これら今までの大学院での学びを振り返ると、「他から学び、他を支える」ために必要なのはこの「+1」の考えだと思う。他が作ったものが土台となり、自身は何かを足し加え、そしてそれがまた誰かの土台となっていく。このようにして教育のみならず社会は成長してきた。

「学ぶ」とか「支える」と聞くと、人は大きなことをしなくてはならないという気持ちになってしまうし、気負ってしまうと自分一人でなんとかしようとしてしまう。しかし一人でできることなど微々たるものである。「学び、支える」ということは他との繋がりを忘れず、今自分にできることを積み重ね、それを他と共有することではないだろうか。そのためにも、この「+1」の心構えを大事にし、これからも努力していきたい。

学びの重層化をするために

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

古田 悠人

11月の月間カンファレンスでは、長期実践報告に向けての説明があった。いよいよ始まると、覚悟を持つことができた会となった。その中で、木村先生から長期実践報告を書く意義について説明があった。長期実践報告は自身の学びを見つめ直すために書き、それも短いスパンではなく、長期で見ることが必要である。その中で短い時間では捉えることのできない部分を位置づけ、価値づけをしていくことで「省察の重層化」を図るものになっていくというものであった。

この話を聞いたとき、私はこの月間カンファレンスで実践報告をしてくださった内村先生の話は非常に学びが重層化されていると感じた。内村先生の実践は、うまくいっていない小中一貫の学校を真の一貫校にするというものであった。

なぜ、私がこの内村先生の実践に「学びの重層化」を感じたのかというと、まず振り返るタイミングがいくつもあったからである。そのタイミングとは全部で3つある。①事象が起きたとき②一つの広い枠組みが終えたとき③月や年などの時間が経過した時の3つのタイミングであった。そのため、内村先生が取り組んできた小学校・中学校合同の教科会、協議会グループの作成や子どもの見取り方研修など、すごく深みや、切実性を感じることができた。

このように他校の実践という枠組みの発表であったが、私は長期実践報告の足掛かりがたくさん含まれた発表であったと感じている。

そのような視点で午後からのグループセッションに参加したが、私はまだ他の院生に比べて省察が甘いと感じた。同じグループであった同じストレートマスターの学生は、それこそ3つのタイミングでの省察がなされていた。授業実践をした際の省察、単元が終わった時の省察、今振り返ってみての省察と、多くの視点で当時の自分を振り返っていた。さて、私はどうかというと当時の気持ちが先行しており、今だったらどう考えるのか、という部分でも省察が足りないように感じた。私はこの月間カンファレンスを通して、どこかやりっ放しになっていたのではないかと切実に感じた。ただ、この時感じたことは私なりの省察であると考えている。さらに、それに気付くためにはやはりこの教職大学院での学びの特徴である「協働」によるもので、他者の実践や他者からの意見が非常に大切であると感じた。

今回の月間カンファレンスは長期実践報告を書くにあたって、かなり前進することができた日であると感じている。ここで学んだ振り返る視点を私の実践に置き換えて省察し、より良い長期実践報告を執筆していきたい。

多彩なメンバーと「他校」との出会い

学校改革マネジメントコース1年履修/小浜市立小浜小学校

豊田 泰寿

「他校の研究から学び、他校の研究を支える」というテーマのもと、長期実践研究報告・1年目のまとめの構想に向けて、11月のカンファレンスが始まった。マネジメント研修を経て、学校改革マネジメントコース1年履修を受講する中で、コロナ禍ということと小浜市という遠方であったことなどから、毎回リ

モートでの参加であったが、今回は初の対面で臨んだ。実際に大学へ行き、面と向かって話をすることに緊張感をもちながら、また、楽しみにも思いながらのスタートであった。

午前の活動は、町田市立武蔵岡中学校の内村佐保莉先生の発表を受けてのグループ・セッションを行

った。「校内研究を通して教員の協働を図る」というねらいで小中一貫校の連携を目指していくという取組であった。小中の文化の違いや考え方の違いがあり、研究主任としてはご苦労をされたということであったが、一貫校であっても、「他校」ということを意識しなければならなかったことに驚かされた。グループ・セッションでは、私立学校内での小中連携の難しさや、授業研究会の持ち方に悩みをもっている学校の話聞かせていただいた。私の勤務校でも、市の研究指定で小中連携について2年間研究を行ってきたところだっただけに、大変興味深い内容の発表であった。勤務校では、小中で共通して育んでいきたい資質・能力を「主体性・協働性・創造性」と位置づけて授業研究を行ってきたが、テーマの設定や研究の進め方などでも連携の難しさをひしひしと感ずることが多かった。また、これらの研究は数年間で終わるものではなく、継続することが大切で、小中がそれぞれの成果と課題を共有し続けることの大切さを改めて実感できた。それが、「他校から学ぶ」ということなのだったと思った。

午後の活動は、「長期実践研究報告・1年目のまとめの構想を語り合う」というテーマでグループ・セッションを行った。このセッションは小中の教員だけでなく、普段ほとんど出会う機会のない会社や園の経営者の方々と話をすることができた。私の構想を受けて、「大変なときにどう乗り切ってきたか」「その時その時のポジションが自分を変えていくこと」

「年齢に応じた視野の広がり」などを考えながらストーリーを構成していけば良いというアドバイスをいただいた。また、何のための記録か～それは、自分のため・自分を知ってもらうため・後輩のため・児童生徒のため～ということを考えていないといけないということ。そのための、書き方で大切なことは以下の3つ～①プロセス (PDCA) ②ストーリー (起承転結) ③視点～が大切。③視点には5つの眼～①虫の目 (物事を詳細まで見抜く視力の良さ) ②鳥の目 (物事を全体から見る視野の広さ) ③魚の目 (時代や社会の流れを捉える「ものの見方」) ④コウモリの目 (物事を反対の立場から批判的に見る姿勢) ⑤けもの目 (ターゲットを設定する) を忘れてはいけないという教えをいただいた。

長期実践研究報告を書くために、今まで勤務してきた数々の学校を振り返ることが必要だが、それらの学校も、今から考えると「他校」であったと言える。自分の経験してきた「他校」、これまで教職大学院のカンファレンスで出会った方々の「他校」、これらから学んだことを生かしながら、ストーリーとして組み立て、長期実践研究報告を構成していきたいと考える。

この11月のカンファレンスでは、初めての対面で、リモートとは違うリアルな言葉を聞けて、さらに深く考えること (省察) することができて大変良い経験をするすることができた。午前・午後のそれぞれに関わることができた皆様に感謝したい思いで一杯である。

他から学び、他を支える意味＝学びを共につくり上げる

学校改革マネジメントコース1年履修/坂井市立磯部小学校

笈田 美香

11月の合同カンファレンスは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」がテーマであった。M2の立石虎太郎さんが、「授業研究・教職専門性開発コースのみなさん」の代表として「他校の研究から学ぶこと、他校の研究を支えることの意味」についての発表があった。教師を志し、日々学び続けている立石さんの身振り手振りが、とても新鮮で温かな眼差しで聞いている自分がいた (お母さんが息子を見ているような感じだったかもしれないが…)。

毎週行う金曜カンファレンスでは、「校種・教科の異なる院生のグループ編成の中で、それぞれのイン

ターン先での学びや自己の実践・研究を語り合うことを通して、新たな視点での学びや自己の振り返り、考えの整理をすることができるのと同時に、お互いを支え合うことにもつながっているということ。明日への実践につなげていくための交流の場であること」また、「繰り返しながら、実践を積み重ねていくことで、教師としての力量形成につなげていくことをねらいとしていること」が分かった。月間カンファレンス等もそうだが、校種・教科・立場・県内外の異なる者同士が対話をするを通して、狭い視野での見方・考え方を打破し、視野を広げて物事を捉えたり、考えたりできるようになり、目の前に立ちはだか

る壁を乗り越えるために、どうすれば良いのか改善策に導いてくれるための大きな効果がある。私自身も身をもって経験している。アドバイスをもらうことが目的ではなく、言葉にして語ることや他者の実践を聴き合うことで、「学びを共につくり上げることができる」のである。立石さんの言葉「他から学び、他を支える意味とは・・・『+1をつなぐ』」が、とても印象的だった。子どもどうしの学び合いの場でも同様に大切なことだと思った。今後、学級づくり、授業づくり、学校づくりに活かしていきたい。また、金曜カンファレンスが院生主体で企画・運営され、M2がコーディネート、マネジメントしていること、参加する人全員にとって学びがあるものになるように考えていることを知り、「学び合い、助け合うコミュニティ」の構築ができているのである。そして、来年度に向けてM1が企画する機会も増えているということで、持続可能なコミュニティづくりも見通していることに、大変感心した。学校現場において、「授業研究・教職専門性開発コースのみなさん」が取り組んでいることから学ぶべきことがたくさんあると思った。

午前の後半は「他校の研究から学ぶ経験、他校の研究を支える経験を語り聴き合う」がテーマであった。私はいつも、他校の授業や研究会に参加することで、自分の実践を振り返りながら、「自分は、ここできていないな」「あのとき、こう問い返したり、切り返したりできれば深い学びにつながったんだろうなあ」

と反省しまくっている。その大きな刺激をもらうことで、次の日からの実践につなげているのだ。しかし、なかなかそううまくはいかないのが現状である。また、これから学習していく総合的な学習のヒントをもらおうと、ある学校の研究集会に、同学年の担任も誘って参加したことは大きな成果があった。学校に戻り、参観した授業について振り返りながら語り合い、自分たちの実践について協働しながら進めていくことができているのだ。坂井市は中学校区内における各学校の指導主事訪問公開授業を参観し合っている。丸岡南中学校の授業および研究会に参観することを通して、昨年度担任していた子ども達の様子を見て、話し合いの力をつけてあげられなかったことに反省したり、小学校の学びが中学校につながりを持ち、活かされていたことに嬉しさを感じたりした。小学校と中学校の学びのスパイラルがつながりを持ち、学びの質が上がっていくことができるようにするためには、今後、小中連携の取組が進んでいく必要があると感じた。グループでの話し合いでも、異校種・異教科の授業を参観することで、「つながる学びを知る」大切さと「教員のつながりをもつ」きっかけになるだろうと意見が出た。

最後に、今回のカンファレンスでもたくさんの学びがあった。その学びを本校の教員に早く話したい思いである。一人でも多くの教員を巻き込んで、今後の実践を進めていきたい。

対面での対話することのよさ ～福井の地で感じたこと～

学校改革マネジメントコース2年/羽島市立中央中学校

熊崎 敦子

「あと何回、福井に行けるかな・・・。」

昨年の大雪を思い出しながら、車で福井大学に向かった。2021年冬は福井県の大雪のニュースを聞いて他人事ではないように感じていた。(福井の先生たちは大丈夫かな)。Zoom越しに福井の窓の外を映されたとき、岐阜とは違う雪景色に距離を感じたが、オンラインカンファレンスが始めると一気に距離は縮まり、日常で取り組んでいる実践について熱心な対話をした。

今年の11月カンファレンスには久々の対面で参加することができた。「最後かも・・・」と思いながら、

初めて福井を訪れたときを思い出した。緊張の中、何が何だかわからないまま、同じテーブルになった先生に自分のことを一生懸命話した。話はまとまっていなかったが、自分が実践していることを話すと共感していただき、曖昧なところは指摘していただいて充実感があった。帰りに同じテーブルになった先生と連絡先を交換し、それ以来、何か不安があると連絡をしては教えていただき、私の支えとなっている。今回も待ち合わせをしたおかげで、安心して講義室に入ることができた。そこにはオンラインをつなぐパソコンや並べられた机、準備されている先生と、いつもと違う空間がとても新鮮だった。いつもは一人

部屋にこもって画面に向かい、あいさつは自分から声をかけることに少し戸惑いながら参加している。自然とあいさつがうまれる。対面では目の前にいる先生方の存在や声のトーン、周りから聞こえてくる別の対話、先生方の語る熱さに、あいづちや即反応で返せる対面の良さを味わった。Zoomの便利さも捨てがたいが、やはり対面のLIVE感は心地よかった。

「他校の研究から学ぶこと、他校の研究を支えることの意味」をテーマに、発表された先生のお話に共感することが多くあった。小中一貫校となり、それぞれだった小中学校が同じ児童生徒を育てていくというビジョンを共有し、連携を図って小中合同の教科部会を設定したり、「自分ごと」にするために全学級が実践発表したりされていた。そこに至るまでの難しさに興味を持った。同じような環境に置かれる(校区内小中1校ずつ)自分にとって、小学校と中学校のつながりをつくるために、思いつくことがあっても現実的に動けていないことを実感した。日程調整やそれぞれの考え方の違いで実現がそう簡単ではなく、思いつく連携も今のところ実現できないままである。ただ教職大学院で学び始めてから、様々な実践に触れ、小学校とのつながりは強く意識することができ、できそうなことをやってみようという思いは常に巡っている。先生方の具体的な実践をヒントにトライしてみたい。

同じテーブルでは、インターンの若い先生方と話す機会を得た。「通常学級で道徳の実践の機会をいただいたので、そこで特別支援教育の理解を深められる道徳をしたいけど、どう進めるとよいか」という相談があった。これまでの私の経験や、まだ見えていないことへのアドバイスをしたが、自分が同じ年齢の時と比べると遥かに教育に対する見方や考え方が鋭く、自分のやりたいことをしっかりと持っていると感じた。またもう一人の先生は、メンターの先生が変わったことで、それぞれの先生の違いと良さを感じ取りながら、自分のものにしようと学びとっている姿が印象的だった。私たちには日々、教師同士で学べる機会がたくさんあるのだから、若い先生と限定することなく、みんなで学び合う場を臆することなく持ちたいと思えた。自分のやりたいことにつなげていこうとする熱意を直接肌で感じ、刺激を受けることができた。対等な関係で全員が話し合える場をつくり、課題に向かうために教師同士も協働することを大切にしていきたい。

午後は、実践の集大成「長期実践研究報告」の構成を語るということで、「書くことの意義」についてた

くさんのヒント、見通し、そして書き始める決意を得ることができた。長期実践報告について口にすれば不安しか出てこない。そんな中、前回オンラインで一緒だった先生と対面で話すことができ、話しているうち、講義室にいる先生方がみんな同じ苦勞に向かう同志だと思ったりやる気が少し湧いてきた。

ファシリテーターの先生から「自分を変えたとき、場所はいつ？どこの学校？」と曖昧なところを問い返されながら、構想について語っていった。1つ1つの問いに思い返しながらかつて話すことで、「そうか、あれはそういうことだったのか」と思い出す瞬間をいくつかメモした。少しずつ形が見えてきたように思う。

グループには企業や幼稚園経営をされている方も一緒に、日ごろ聴く機会のない話は大変刺激になった。「長期実践研究は何のために書くのか？」という問いには戸惑いしかなかった。「自分のため・知ってもらうため・公益のための3つの目的のうち、自分が実践を残すということは、後輩の先生の何かヒントになるためという思いで書かない」と言われ衝撃だった。自分の中にその目的がなかったことに気づかされた。

企業のマーケティングの視点からは「読みたいと思わせること」が大切で、「プロセス」「ストーリー」「視点」をもち「読み手を意識すること」が大切だと教えていただいた。また「虫の目(小さい目)」「鳥の目(俯瞰して見る)」「魚の目(流れ・時代から見る)」「コウモリの目(逆、別の視点、角度)」「けものの目(目標に向かって)」の5つの目で物事を捉えるということもすぐにメモした。これまでのカンファレンスでの見方、考え方に通じるものがあると感じた。「書くこと(仕上げること)」だけに目がいていた自分に気づき、またそういったことを端的にかつ求められているものに鋭くコミットする考え方、テクニックは企業のすごいところだと改めて感じ、大変勉強になった。

今回も自分だけでは気づけなかった実践の裏にある思いや、それにかかわる出来事、過程を掘り起こしてもらえよう感覚を味わうことができた。一人で考えていても生まれてこなかったものが、たくさん生まれた対面カンファレンスだった。様々な方と話すことで自分にはない視点をいただき、LIVE感で多様なメンバーで語り合うことによる学びの充実と楽しさを肌で感じ、そして、長期実践論文への英気を養った。



国際展開（6月ラウンドテーブルの感想文）

Changes stemming from Lesson Study and Sharing

Kakash Secondary School, Battambang, Cambodia, Chhoem Sosakkona

In the summer roundtable on June 18th, 2022, I was assigned as a speaker in a group discussion. There were two speakers in my group. Each one of us was given 30 minutes each for practical research sharing. I focused on my school challenges, practice, and lesson study. For challenges, I talked about managing extensive classes (around 60 students) with a lack of teachers, insufficient teaching and learning materials, and discipline issues of students. And to help assess students' learning, I have some methods for that, such as reviews, quizzes, homework, classwork, and monthly test.

Whereas lesson study is commonly used at the Teacher Training Centers in Cambodia, it is less conducted from primary schools to senior high schools. LS meeting is to deliver more content and pedagogical knowledge to be included in the lesson plans. By my practice experience in relation to the lesson study, I created the action plan and guideline to ensure I could work well with my colleagues. It is advised to set up a clear action plan and give them concise guidelines for conducting a satisfactory lesson study.

In the process guideline, I raised four main points: elaboration on old and new styles of open classes and LS meetings, how students should be treated or guided, teachers' roles in class participation, and what the participants will do and share in the reflective LS meetings. I found it hard at first to better the open classes and LS meeting from what the school has been doing and what I learnt and experienced in Fukui. I tried to encourage and explain to them how helpful a new concept/style of lesson study is. I chose the English subject to conduct the open class. As the result, we got a satisfactorily desired achievement. Even though it didn't fully meet what we expected, we appreciated the outcome.

Moreover, in the roundtable, I compared the images of what figured out over the lesson study before and after conducting a new style of it I have brought from schools in Japan.

In previous time, open classes were carried out with assigned teachers of the same or relevant subjects. All observers tended to sit at the back to observe teacher's



teaching. They mainly focus on teacher's lesson plan, teaching materials, classroom environment, time management, and how teacher manages the class. Yet after using the new styles of lesson study and working with my colleagues, we found the different. At this time, any subject teacher is welcome and encouraged to join open classes and reflective LS meeting. They started walking around the class to take note and noticed students' work and responses. We turned to care about the interaction between students to students and teachers to students. Students' reaction and teaching methods were greatly observed by the participants.

Whereas concerning the previous reflective meeting style, some participants gave no ideas or impressions at their convenience. In the meeting, they said about what the teacher did with students and how the teacher organized the lesson plan. Constructive feedback was shared, but somehow it seemed offensive to the teacher who taught. In short, I noticed that most participants talked much about teachers' teaching rather than students' learning.

Surprisingly, after carrying out the new style of the lesson study, my colleagues seemed more aware of its milestone and what to do in open class participation and LS meeting. Every one of them was encouraged to share ideas and comments. This time, they went in-depth on how teachers and students interacted in learning. Some of them brought up their perspectives over students' learning by including learners' responses in group discussions. And some shared their experiences related to the same or similar situations. That's why everyone in the meeting could learn and understand each other's practical experience to cultivate students' learning.

After my shared speech, all of my group members started giving comments/impressions and asking me some questions. Some of them were curious about how I could manage very large classes; some asked about what challenges I had before and during conducting the lesson study with my colleagues. And some got impressed with what I had done and the result in changing from old styles of open classes and reflective meeting to the new ones.

Throughout the summer roundtable, I greatly realized the priceless importance of the reflective sharing meeting with educators from different places and roles. It was not just a time to listen to their empirical knowledge but also to be welcome for sharing my challenges and practices with other participants. I felt impressed to share my

practical experience and got many valuable comments and eliciting questions from them. That makes me more encouraged and cooperative for the next time. Moreover, by the roundtable I notice that care should be highly taken of lesson study meeting with fellow colleagues or other practitioners. Because it is a very good moment for sharing practice, challenges, and concerns with each other regarding student's learning development and finding viable solutions together. In the roundtable, I could see how practitioners have faced the situation in their school and dealt with that. Every participant has his own difficulty and strategy to curb it. That's why I could gradually be flexible and aware of what I should and should not do with my students in any situation.

Overcoming the Challenges of Introducing Collaborative, Reflective Inquiry in the Philippines

Project Officer, Philippine National Research Center for Teacher Quality,

Michael Wilson I. Rosero

Whoever comes across the notion of collaborative, multi-loop reflective inquiry would find it very appealing. Further, whoever experiences it firsthand would certainly attempt to make it work in their contexts. However, it is not always easy to bring the practice and translate its essence to the contexts of other countries. It is especially challenging if you are not directly involved in the educative process.

Participating in the summer sessions of Fukui Roundtable and learning how my fellow researchers, who are teachers, are able to contextualize the processes and practices of lesson study in their own countries, I have become aware of my own challenges and struggles. Compared to them, I have yet to engage my fellow educators and share my knowledge with them. As a research staff of the Philippine National Research Center for Teacher Quality, I am only capable of providing advice to the Department of Education at the policy level. However, listening to them as they shared their victories and issues, I have also become mindful of my own successes.

I left Fukui with a lot of knowledge about lesson study and how it impacts collaborative and reflective inquiry starting from the classroom and extending to schools. At the compulsory education school attached to the University of Fukui, I explored, witnessed and learned that student-centered learning necessitates an environment where learners can freely conduct their inquiry, and express their thoughts and ideas by creating and communicating with

their classmates and teachers. Teachers acknowledge this phenomenon and incorporate it into their research inquiry and professional development. Further, a supportive structure is cultivated and nurtured in school so teachers can include their own experiences, as well as their students' ideas and reflection in designing their curriculum.

I went to Fukui to experience and immerse myself in the Japanese education system. Through classroom observations and participation in practice research meetings, I explored and understood how school teachers, school leaders, and students interact and support each other. When I returned to the Philippines, I was enthusiastic and hopeful that I can introduce the ideas and concepts I learned during my stay in a Japanese school to Filipino educators. However, my personal circumstances, coupled with the systemic challenges, proved to be walls that I need to overcome. I expected to return to my old job in the Department of Education as the one in charge of the national performance management system. However, due to some issues in the application process, I made a detour and joined the Philippine National Research Center for Teacher Quality as their research staff again.

My first work back at the Center involved updating of the Results-based Performance Management System tools and processes. The activity provided me an opportunity to introduce the importance of reflection and writing reflective records in the performance assessment process.

In the first year of implementation of the RPMS, the

Department of Education introduced the idea of reflection on practice through writing annotations. According to the RPMS Manual,

Annotations are self-reflections, explanations or presentational mark-ups attached to documents, artifacts or Means of Verification (MOV) that you submit for the RPMS. They are important in instances when the evidences or artifacts presented in teacher portfolios cannot capture the whole dynamics of the teaching and learning process. Further, annotations establish a connection between the evidences and the Rater, thus, facilitating the review of the portfolio as an essential step towards becoming a more reflective practitioner is through writing annotations in professional development portfolios.

In Japan, for instance, at the compulsory education school attached to the University of Fukui, teachers, teachers write, read and discuss reflective practice records. Mangulabnan (2017) claims that reflective practice records (RPR) are “reflective narratives of a teacher’s practice as a result of a longitudinal collaborative inquiry about students and learning holistically painting a picture of the learning,

of the teacher and the students, that took place.” Through practice records, teachers are given opportunities to organize and synthesize learning episodes and gain “new perspectives brought by reflection” (Mangulabnan, 2017). The practice record also includes students’ data such as words, ideas, conversations, expressions, among others, which allows teachers to create “a more localized and contextualized learning theory from actual practice” (Mangulabnan, 2017).

During the workshop, I was able to introduce the concept of reflective practice records and the team adapted it as one of the revisions in the means of verification (evidence of practice) in the teacher’s portfolio. In the RPMS, reflective notes are seen as proof of attainment of the indicator that focus on participation in collegial discussions. Such activities include learning action cells, lesson study, and other in-school professional development activities.

The table below shows the revision of the RPMS tools incorporating reflective notes.

Objective	Means of Verification (2019)	Means of Verification (2022)
8. Participated in collegial discussions that use teacher and learner feedback to enrich teaching practice.	1. Personal notes of teachers on LAC sessions/FGDs/meetings to enrich teaching practice, with proof/s of attendance 2. Minutes of LAC sessions / FGDs / meetings on use of teacher and learner feedback to enrich teaching practice with proof of attendance 1. 3. Others (Please specify and provide annotations)	1. Reflection notes of teachers on their demonstration of teaching practices following participation from LAC sessions / FGDs / meetings that use teacher and learner feedback to enrich teaching practice, with proof/s of attendance 2. Minutes of LAC sessions / FGDs / meetings on use of teacher and learner feedback to enrich teaching practice 2. Proof/s of attendance in LAC sessions / FGDs / meetings

The introduction of reflective practice records to Filipino teachers can help improve the practice and culture of reflection on their practice. The shift from annotations to more elaborate records of practice can help facilitate, not just the examination of the evidence in the teachers’ portfolio, but also an in-depth understanding of the teaching-learning process. As it stands, the annotations are more focused on making the assessment process easier, rather than developing teachers as reflective practitioners.

Introducing the collaborative and reflective inquiry to Filipino educators could be very challenging. It would take

time and constant practice for Filipino teachers to learn and understand it. There are also a lot of factors that hinder the cultivation of a collaborative and reflective culture of inquiry in schools. For instance, teachers are plagued with non-teaching tasks, they are bothered with their insufficient remuneration and other issues that take away their focus on teaching. The support structures, as well as monitoring and evaluation mechanisms, are insufficient. For it to work, the collaborative practice in schools must be strengthened and integrated into the school culture and education system.

New Education System and Lesson Study in Egypt

Egypt Japan School, Obour, Cairo, Egypt, Marwa Sakran

I have attended the Roundtable session with some colleagues and I have learned a lot from the experiences and the feedback.

2.0 Egypt's New Educational System:

Egypt has implemented a new educational system since 2018. The new educational system improves the students' skills and knowledge through new curricula helps to enrich the students' power of knowledge, information and skills through life practice more than studying. The new system started outcomes are the main fourteen life skills that everyone should gain to start their adult life, thus it helps the students to learn a lot through the school before they start their real life after school graduation. The development of the new curricula needs lots of teachers' trainings and knowledge.

The challenges facing the new education system 2.0 and teachers continue to intensify. The demanding of high skills levels teachers continues to grow substantially. The main task for teachers became to transform the traditional ways of teaching and education and face challenges with traditional parents. The new educational system requires talented, highly skilled and creative teachers. It's hard to change traditional teachers to become creative and searchable more than to stuck to the curriculum.

We started to train teachers to open their minds to gain more creativity than to be prisoned in a book title. Teachers required to be trained on the curricula objectives standards and learning outcomes, as assessments and evaluations are now based on the outcomes. Some young teachers started to learn how to be a creative teacher.

one of the main challenges that teachers face is to transform their plans and classes from teacher center plan to students' center plan to start to absorb the students' way of thinking and develop it. Teachers started trainings to develop all the skills needed to be set in their classes.

Lesson Study in Egyptian Japanese Schools:

Egyptian Japanese Schools insists to have lesson study in their plans, as it is one of the main practices in our schools. The Project Management Unit (PMU) which has jurisdiction over EJS has applied some trainings for the principals and vice principals on lesson study; principals and vice principals should apply what they have learned in the training in their schools according to their school capacity and work plans.

The objectives of the lesson study in our schools:

- teachers learn from each other new ideas
- teachers cooperate to have the best style of the lesson and share ideas
- teachers try new ideas and check how successful new ideas can be

How to apply the lesson study?

- Teachers have a schedule for their lesson study in their schedules.
- Teachers have at least one subject meeting weekly, as all teachers for the same subject gather to share new ideas.
- In these meetings teachers brainstorm ideas for the lesson planning of the next lesson study and down their ideas.
- Teachers share their ideas to start find the best way for their lesson study.

During the lesson study

Though lesson study is not a teacher's effort, it is all teachers' work, effort and ideas. The one teacher who perform the lesson study, is performing all teachers' work. So, teachers watch to check how successful can their ideas be or not. Teachers jog down all their notes.

After the lesson study performance

- Subject teachers meet for a subject meeting to discuss all their notes for the attended lesson study
- Teachers start to check the positivity in their notes to use them in their own work
- Teachers start to discuss the negativities to learn and improve themselves to avoid these negativities in their own sessions

After the lesson study reflection:

Teachers are supposed to take all the notes seriously and apply the positivity and avoid the negativities in their actual classes.

After attending the Roundtable organized by Fukui University:

We have learned a lot in the roundtable:

- Teachers' meetings and discussion help them a lot to share their experiences and apply what they have learned
- The lesson study is one of the main topics and activities that is performed in Japan from a long time and has a great impact there and increases the teachers' performance
- Teachers form the same subject or free teachers should attend to learn from their colleagues



研究会情報等

163号、164号でも掲載しましたが、研究会等の案内が寄せられた情報から1月以降の公開研究会についてお知らせいたします。

皆様にとってもお忙しい季節だとは思いますが、同僚の学びに耳を傾ける機会としてはいかがでしょうか。

●研究会／研修会

- ・1月27日（金）福井大学教育学部附属特別支援学校 公開研究会
- ・3月7日（火）～9日（木）福井県教育研究所 ふくい教育フォーラム

●入試説明会

- ・12月25日（日）福井大学連合教職大学院入試説明会

Schedule

12/24, 25, 26 Sat. Sun. Mon.
冬期集中講座サイクル A 日程
2023/1/5, 6, 7 Thu. Fri. Sat.
同 B 日程
2023/2/5 Sun.
長期実践研究報告会

学生募集日程

令和5年度 第1回募集

出願期間：令和5年1月18日(水)～24日(火)
試験日：令和5年2月4日(土)
合格発表：令和5年2月13日(月)

令和5年度 第2回募集

出願期間：令和5年2月15日(水)～21日(火)
試験日：令和5年3月4日(土)
合格発表：令和5年3月13日(月)

過去問を
入手できま
す。

募集要項を
入手できま
す！

出願を考えている方、関心のある
方は、お気軽にご参加ください。

※参加希望の方は、必ず事前にEメールで入試課
に連絡(氏名、住所(資料送付先)、電話番号、
所属、志望コース)してください。後日zoomの
URLとパスワードをお送りいたします。

教員免許取得プログラム (推薦選抜を除く)

授業研究・教職専門性開発コースの入学で、教
職に対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、
高等学校(取得出来ない免許もあります。)又は特
別支援学校の教育免許取得の道を拓くものです。
授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割
納入することになります。

福井大学学務部入試課

電話番号 → 0776-27-9927

入試課メール → g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

格数によりて 人と社会の未来を拓く



福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507 福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500 (代表)



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】2022 年最後の
ニュースレターが無事に発刊さ
れました。今年も1年、教職大
学院の歩みをご覧いただき、あ
りがとうございました。来年も
皆様とともに展開豊かな1年を
過ごせたら嬉しく思います。ど
うか皆様、良いお年をお迎えく
ださい。来年もどうぞよろしく
お願いいたします。

教職大学院 Newsletter

No.165

2022.12.24 内報版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp